

御 料 牧 場 遺 跡

— 麻薬犬訓練所建設予定地内埋蔵文化財調査 —

1988

建 設 省
財団法人 千葉県文化財センター

御 料 牧 場 遺 跡

— 麻薬犬訓練所建設予定地内埋蔵文化財調査 —

1988

建 設 省
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

北総台地に位置する成田市は、日本の表玄関、新東京国際空港があり、国際都市として急激に変貌しつつあります。

一方、周辺は内陸部とはいえ緑と水に恵まれた地域で、このような自然環境はいつの時代においても人々の生活に適していたようで、数万年前の先土器時代から中・近世に至るまで数多くの著名な遺跡を残しています。

近年、国際化社会の発展に伴い、国際犯罪、とりわけ麻薬の密輸も年を追うごとに増加し、国民生活をおびやかに至っております。そこで、麻薬の流入を水際で防止するため優秀な麻薬捜査犬の養成が急務となり、国は空港に隣接する当該地に麻薬犬訓練所の建設を計画しました。県教育委員会は用地内に所存する埋蔵文化財の保護、取扱について関係諸機関と慎重に協議を重ねた結果、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることになりました。

御料牧場遺跡は外周部に野馬土手がめぐり、内部にも区画された土手が残っており近世牧を解明する良好な遺跡となりました。また、先土器時代から縄文時代にかけての遺物も多く出土しました。発掘調査は昭和61年4月から8月まで実施し、昭和62年度整理、報告書刊行のはこびとなりました。本書が千葉県や成田市の歴史を学ぶ上で、また、文化財保護思想の涵養と普及に役立つことを願ってやみません。

終りに、発掘調査から整理作業まで御指導、御協力を賜わった千葉県教育委員会、建設省関東地方建設局、成田市教育委員会の諸機関、並びに現地調査、整理作業に携わられた調査補助員の皆様方に心から感謝いたします。

昭和63年3月

財団法人 千葉県文化財センター

理事長 山本 孝也

凡　例

1. 本書は、麻薬犬訓練所建設事業の実施に伴い、事前調査した成田市御料牧場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和61年4月1日から8月31日まで実施した。
3. 発掘調査の実施は、建設省関東地方建設局の依頼により、文化庁及び千葉県教育委員会の指導を受けて、財団法人千葉県文化財センターが行なった。
4. 御料牧場遺跡の遺跡コードは、行政管理庁指定統計コード成田市（211）、千葉県文化財センター遺跡コード（040）を使用し、211-040とした。
5. 発掘調査は、部長鈴木道之助、班長高橋賢一のもとで主任調査研究員太田文雄と調査研究員麻生正信が行なった。
6. 整理作業は、昭和61年9月1日から9月30日、昭和62年8月1日から10月31日までの2回実施し、1回目は部長鈴木道之助、班長高橋賢一のもとで、2回目は部長堀部昭夫、班長矢戸三男のもとで太田文雄が行なった。
7. 本書の作成、執筆及び編集は太田文雄が行なった。
8. 方位は座標北を使用した。
9. 遺跡周辺の航空写真は京葉測量株式会社の提供を受けた。
10. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関の御協力を頂いた。ここに感謝の意を表します。
建設省関東地方建設局、千葉県教育委員会文化課、成田市教育委員会、船橋市郷土資料館

本文目次

序 文	
凡 例	
第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 遺跡の位置と環境	1
第2節 調査の方法と順序	1
第2章 遺構と遺物	8
第1節 先土器時代	8
第2節 繩文時代	13
第3節 近 世	19
第3章 まとめ—房総の牧と御料牧場遺跡—	40

挿図目次

第1図 周辺地形図 (1/50,000)	2
第2図 御料牧場遺跡周辺地形図 (1/5,000)	4
第3図 大グリッド配置図	5
第4図 小グリッド配置図	5
第5図 御料牧場遺跡地形、遺構配置図 (1/1,500)	6
第6図 土層柱状図	7
第7図 第1ブロック遺物出土状況図 (1/80)	9
第8図 第2ブロック遺物出土状況図 (1/80)	11
第9図 先土器石器実測図 (2/3)	12
第10図 繩文時代土壤 (005、006) 実測図 (1/80)	16
第11図 包含層出土繩文土器拓影図 (1/3)	17
第12図 包含層出土繩文土器拓影図及び石器実測図 (1/3、2/3)	18
第13図 001号竪穴状遺構実測図 (1/80)	19
第14図 002号竪穴状遺構実測図 (1/80)	20
第15図 003号竪穴状遺構実測図 (1/80)	21
第16図 004号竪穴状遺構実測図 (1/80)	22
第17図 土手配置図	23

第18図	土手 1、2 土層断面図 (1/80)	25
第19図	土手 3、4 土層断面図 (1/80)	26
第20図	土手 5、6 土層断面図 (1/80)	28
第21図	M-004実測図 (平面1/200、断面1/80)	29
第22図	M-015、016実測図 (平面1/200、断面1/80)	31
第23図	M-017実測図 (平面1/200、断面1/80)	32
第24図	M-001~003実測図(1) (平面1/200、断面1/80)	34
第25図	M-001~003実測図(2) (平面1/200、断面1/80)	35
第26図	M-005~011、018実測図 (平面1/200、断面1/80)	36
第27図	M-012実測図 (平面1/200、断面1/80)	37
第28図	M-014実測図 (平面1/200、断面1/80)	39
第29図	小金、佐倉両牧位置図	40
第30図	小金、佐倉牧野馬焼印図	41
第31図	下総牧場建物配置図	46
第32図	香取牧「捕込」復原図	47

図 版 目 次

- 図版 1 遺跡周辺航空写真
- 図版 2 土手 1、2 近景
- 図版 3 北辺外縁部土手近景、土層断面
- 図版 4 第 1 ブロック、第 2 ブロック遺物出土状況
- 図版 5 005、006全景
- 図版 6 001号竪穴状遺構全景、002号竪穴状遺構全景
- 図版 7 003号竪穴状遺構全景、004号竪穴状遺構全景
- 図版 8 M-001~003全景、土層断面
- 図版 9 M-005~011、012、014、017全景
- 図版10 M-004全景、土層断面
- 図版11 土手 1、2 土層断面
- 図版12 土手 3、4、5 土層断面
- 図版13 先土器石器、包含層出土遺物
- 図版14 包含層出土遺物

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と環境

千葉県北総台地北東部成田市三里塚字御料牧場1-45に所在し、新東京国際空港南側の台地上に位置する。

遺跡付近は南下して九十九里平野から太平洋へ注ぐ栗山川に流入する高谷川、木戸川の小支谷と、北流して利根川へ注ぐ根木名川に流入する香取川等の小支谷の分水嶺となっており、緩やかな40m前後の丘陵地が広がり、四方に小支谷が入り込んでいる。

遺跡はその分水嶺にあたり、遺跡の立地する台地中央は西側を流れる木戸川最奥部の小支谷が入り遺跡を二分し、さらに遺跡東辺を通る県道成田～松尾線を隔て数十mの地点に高谷川の小支谷が開折している。遺跡周囲は高い所で3m程の土手がめぐり、南北辺200m、東辺300m、西辺180mの台形状をなし、内部も数区画土手によって区切られている。この敷地の北半はほぼ40～41mの平坦地が展開するが、南半は西側から入る小支谷による浅い谷地となる。南西端には隣接する台地斜面部が若干突出している。

遺跡名となった「御料牧場」は字名を使用したが、空港内に所在した下総御料牧場と同様に宮内省管轄の牧場で軍馬等の育成に給し、その後、牧場閉鎖とともに大蔵省に移管された土地である。

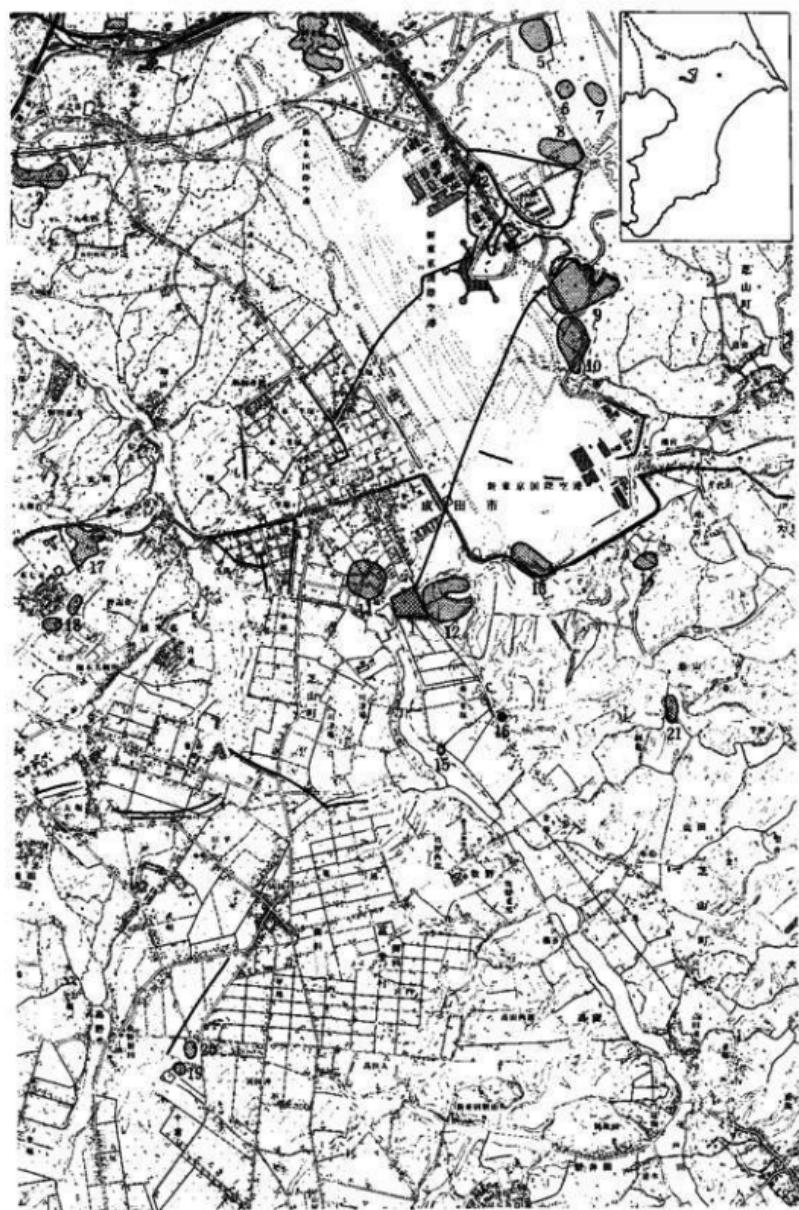
第2節 調査の方法と層序

発掘調査は36.500m²を対象に、確認調査を昭和61年4月7日から6月30日まで、本調査を7月1日から8月31日まで実施した。

発掘調査を実施するに当たり、公共座標に基づき40m方眼単位の大グリッドを設定、その大グリッドをさらに4m方眼単位の小グリッドに細分して1単位の大グリッドが100単位の小グリッドから構成されるようにした。グリッドの名称は、大グリッドの縦列を西からA・B・C……、横列を北から1・2・3……として個々の大グリッドを1A、2B等と呼称した。また、大グリッド内の100単位の小グリッドを北西隅から南東隅に向かい順次00、01……98、99と設定した。

グリッド設定後、遺構、遺物の分布状況を把握するため、台地平坦部を中心に2×4mの試掘坑を設定、上層の確認を総面積の約10%実施し、土手の土層観察も同時に実行した。さらに下層の確認を約4%の割合で実施、立川ローム最下層まで掘り下げた。

本調査では、竪穴状遺構、溝、土手を中心先土器時代ブロック2か所、縄文土器包含層を拡張調査した。縄文土器については遺構が伴わないので、グリッドごとに一括して記録、収納



第1図 周辺地形図 (1/50,000)

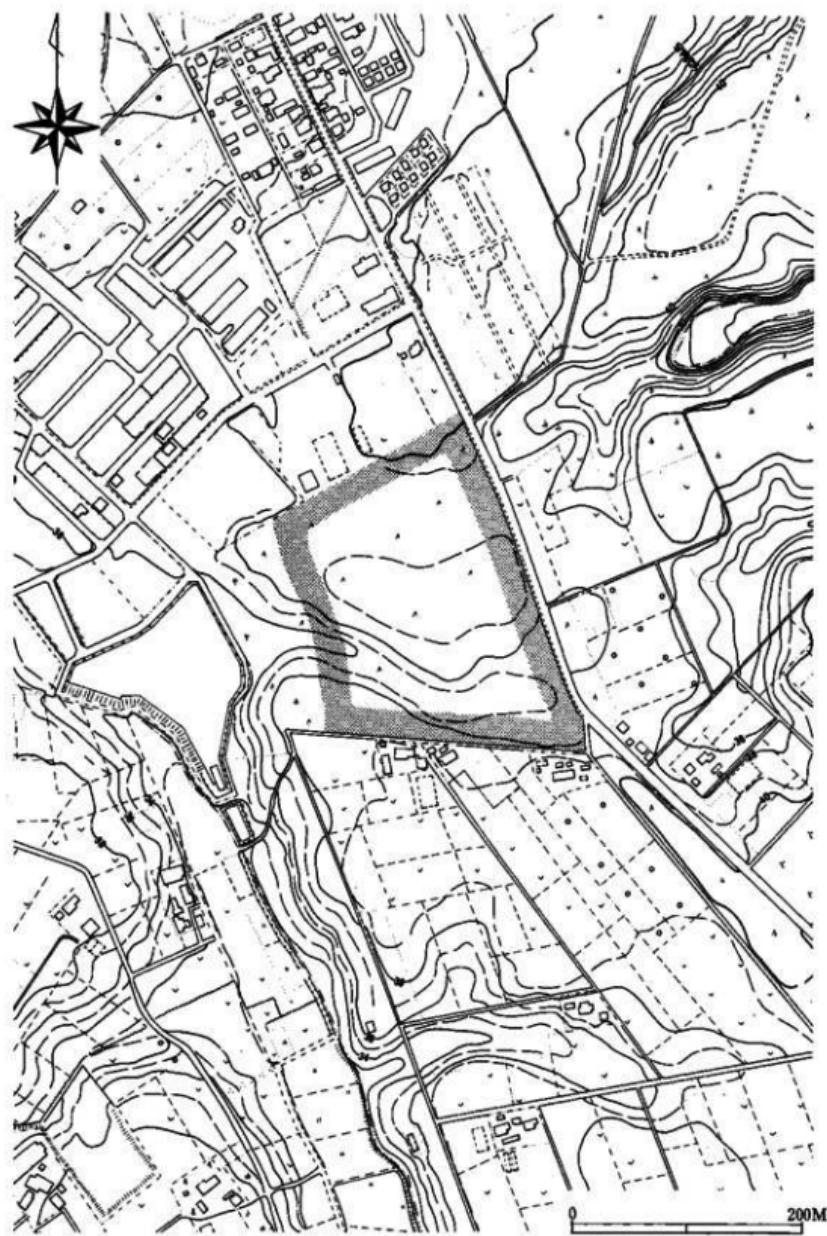
周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代・遺構・遺物等	No.	遺跡名	時代・遺構・遺物等
1	御料牧場	先土器・縄文・近世。野馬土手・堅穴状遺構・溝・陥穴・土壤	9	三里塚No.4	先土器・縄文・近世。住居址・陥穴・炉穴・溝(加曾利E)
2	駒井野城	中世城跡	10	三里塚No.3	先土器・縄文。住居址(細石刃・細石核・井草・夏島・阿玉台)
3	三里塚No.63	先土器・縄文・奈良・平安・中近世。住居址・陥穴・野馬堀・溝(ナイフ・剣片・称名寺・加曾利B・須恵器)	11	井森戸	縄文・古墳。住居址・溝(茅山・黒浜・浮島・土師器・鉄器・玉類)
4	三里塚No.62	先土器・縄文・弥生・奈良・近世。住居址・焼土跡・陥穴・溝・土壤・土手(ナイフ・石核・スクレイバー)・押型文・戸戸上層・鶴ヶ島台・茅山・阿玉台・印手・十王台・土師器・須恵器・鉄滓)	12	南三里塚粗神	縄文・古墳。土壤・土手・溝(茅山・加曾利E・土師器)
5	三里塚No.14	先土器・縄文・奈良・平安。住居址・炉穴・陥穴(鶴ヶ島台・茅山・戸戸上層・鉄滓)	13	五十石込	近世捕込。
6	三里塚No.6(木の根)	先土器・縄文。住居址(井草・夏島・土偶)	14	笠木山	先土器・縄文。
7	三里塚No.5	先土器・縄文。住居址	15	松作	先土器・縄文。
8	三里塚馬場	先土器・縄文・古墳・中世。堅穴状遺構・陥穴・溝(細石刃・ナイフ・ポイント・茅山・安行II・土師器・石核)	16	両国沖	縄文。
			17	両国沖III	先土器・縄文。
			18	古宿	縄文・奈良・平安。(堀之内・土師器・須恵器)
			19	樅現	古墳・奈良・平安。近世塚
			20	大台西藤ケ作	古墳・奈良・平安。円墳
			21	宮門	縄文・古墳。(阿玉台・加曾利E・土師器)
			22	三里塚No.22(古込)	近世捕込

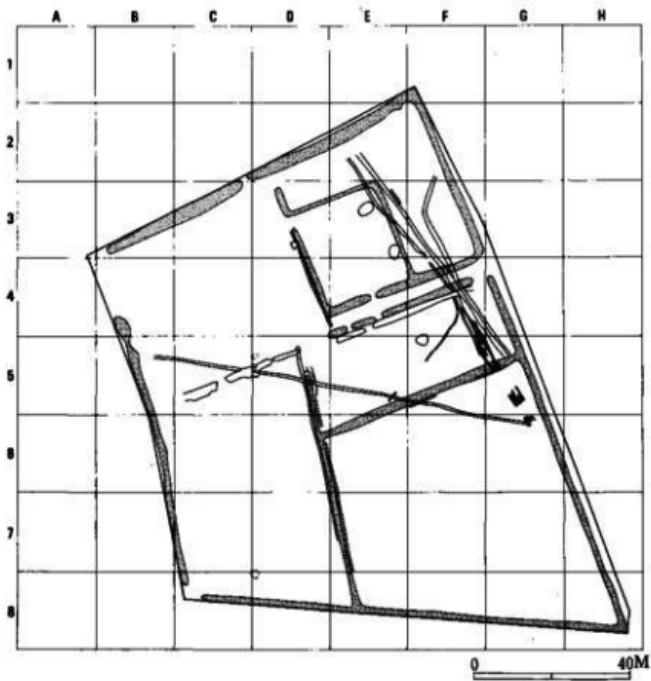
* 地図中の太線は野馬土手を示す。

既刊報告書一覧

- 成田市中世城郭址調査報告書 武田宗久・村田一男他 市史編纂室 昭58
- 成田市間野台遺跡発掘調査報告書 柿沼修平・道沢明 同調査会 昭54
- 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書III-No.14遺跡 西山太郎他 (財)千葉県文化財センター 昭58
- 『木の根』-No.5, 6遺跡 中山吉秀他 (財)千葉県文化財センター 昭56
- 成田市三里塚馬場遺跡 小林清隆 (財)千葉県文化財センター 昭57
- 主要地方造成田松尾線IV-井森戸遺跡他 高橋賢一他 (財)千葉県文化財センター 昭61
- 笠木山遺跡 篠原正 富里村教育委員会 昭55
- 松作遺跡発掘調査報告 篠原正 富里村教育委員会 昭55
- 両国沖III遺跡発掘調査報告 篠原正 富里村教育委員会 昭57
- 『成田用水』 平岡和夫他 山武考古学研究所 昭54
- 『宮門』 平岡和夫・八角静 山武考古学研究所 昭50
- 『三里塚』 西野元他 千葉県北総公社 昭46



第2図 御料牧場遺跡周辺地形図 (1/5,000)



第3図 大グリッド配置図 (1/1,500)

した。なお、調査地内に繁植していた立木部分は緑地として残すため、部分的に調査除外となつた。

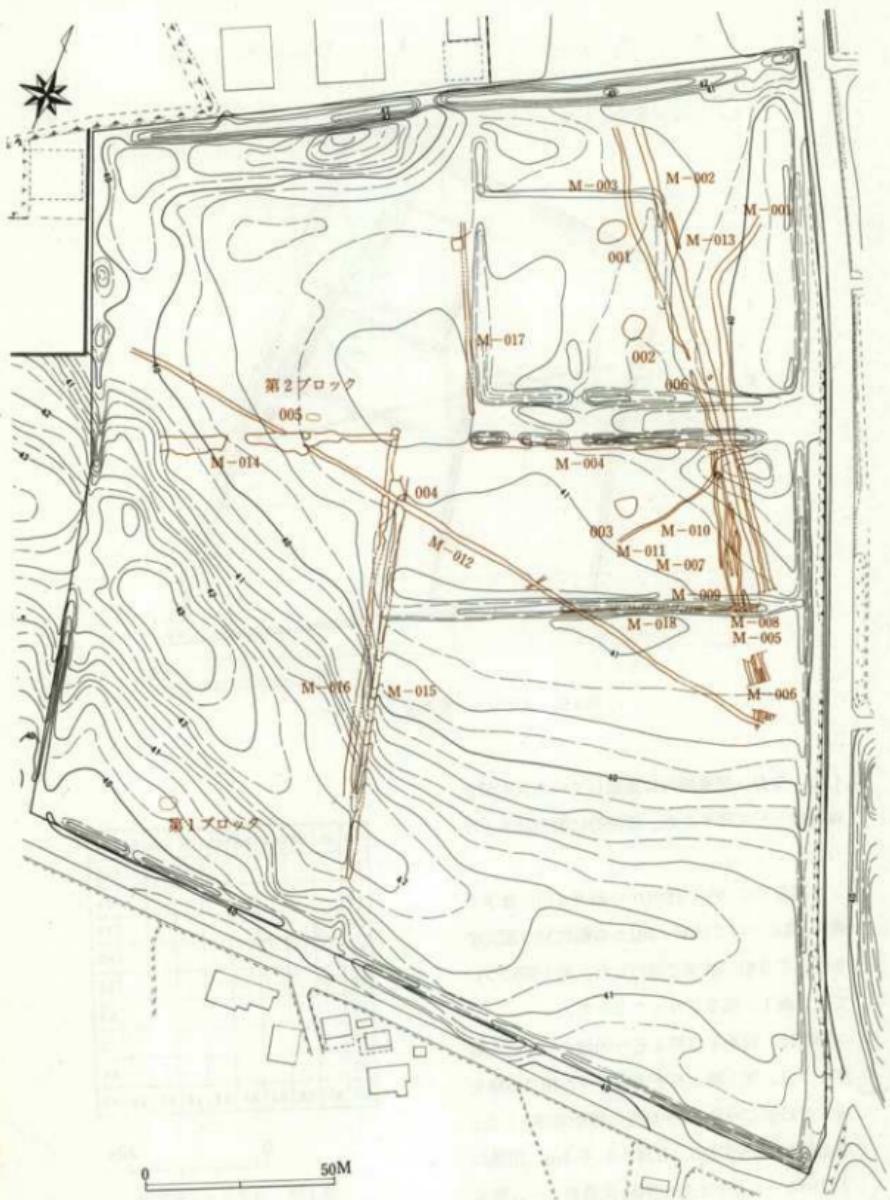
遺構番号は、竪穴を001から順次3桁の数字で表示、溝についてはM-001から順次Mの頭文字を付して3桁の数字で表わした。先土器については、第1、第2ブロックとした。

層序は、台地平坦部4E-00地点でモデル層序を作成、表土層より下末吉ローム相当の粘土層まで15層に分層し、平坦地の標準層序とした。表土層が0.2~0.3m、II層0.3~0.4m、III層以下立川ローム層が1.2m前後、武藏野ローム層が1.4m前後であるが、傾斜地では若干異なる。

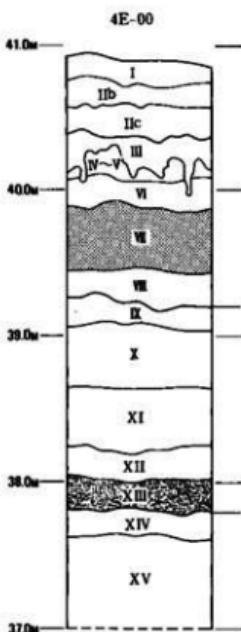
00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10									19
20									29
30									39
40									49
50									59
60									69
70									79
80									89
90	91	92	93	94	95	96	97	98	99



第4図 小グリッド配置図



第5図 御料牧場遺跡地形、遺構配置図(1/1,500)



第6図 土層柱状図

以下、各層の特徴を解説する。

I層 表土（耕作土）

IIb層 橙褐色土層、いわゆる新期テフラを含む層で、縄文後、晩期の土器片が出土する。

IIc層 暗褐色土層、縄文時代の包含層で、IIbより暗い。

III層 黄褐色軟質ローム層、いわゆるソフトローム層で、樹枝状にVI層まで軟質化しているところもある。

IV～V層 黄褐色硬質ローム層、いわゆるハードロームで、第1黒色帯に当たる層だが分層はできなかった。

VI層 明黄褐色硬質ローム層、始良Tn火山灰層で、上部に黄白色のブロックが目立つ。クラックが顕しく発達し、削るとシャリシャリと硬く粗い音がする。

VII層 暗黄褐色ローム層、第2黒色土帯で、赤色スコリア粒を多く認める。

VIII層 暗褐色ローム層、上層にくらべ灰色がかりやや潤る。赤色スコリア粒を若干含み、いも石も多い。立川ローム最下層である。

IX層 淡灰褐色粘質ローム層、粘性が強く軟質でクラックはさほど発達しない。

X層 暗灰褐色粘質ローム層、粘性が強く軟質だがクラックが入る。上・下層より青味が強く暗い。

XI層 暗褐色粘質ローム層、粘性が強く、上部では明るいが下部にいくほど暗くクラックも発達する。全体に黒色の植物根が入る。

XII層 灰黄褐色粘質ローム層、かなり粘性が強く軟質で、斑文状に灰黄色土がみられる。

XIII層 橙褐色軽石層、東京パミス層で擗大のブロックをなし、堅くしまる。武藏野ローム最下層である。

XIV層 暗橙褐色粘土層

XV層 青灰褐色粘土層

第2章 遺構と遺物

第1節 先土器時代

先土器時代の遺物は2地点より数点のまとまりで検出できた。これらの遺物のまとまりをブロックと仮称し、それぞれのブロックの説明を記す。

第1ブロック（第7・9図1～5、図版4、13）

出土遺物総数は8点で、そのうち2点は流れ込みと考えられる。石器はナイフ形石器2点、他は剥片である。

出土遺物の平面分布は長径6m、短径5mに散在し、2点は谷傾斜面に流出している。出土層位はIV～V層が主体を占める。

第2ブロック（第8・9図6、図版4・13）

出土遺物総数は5点で、石器は石核1点、他は剥片だが3点は石核に接合する。

出土遺物の平面分布は長径3m、短径1mの長楕円域を範囲とする。出土層位はVI層下部からVII層上部であるが、VII層上部と考えて良いようである。

今回の調査では、ナイフ形石器を含む計13点の遺物の出土をみた。以下、若干の説明を記す。

ナイフ形石器（第9図1、2）

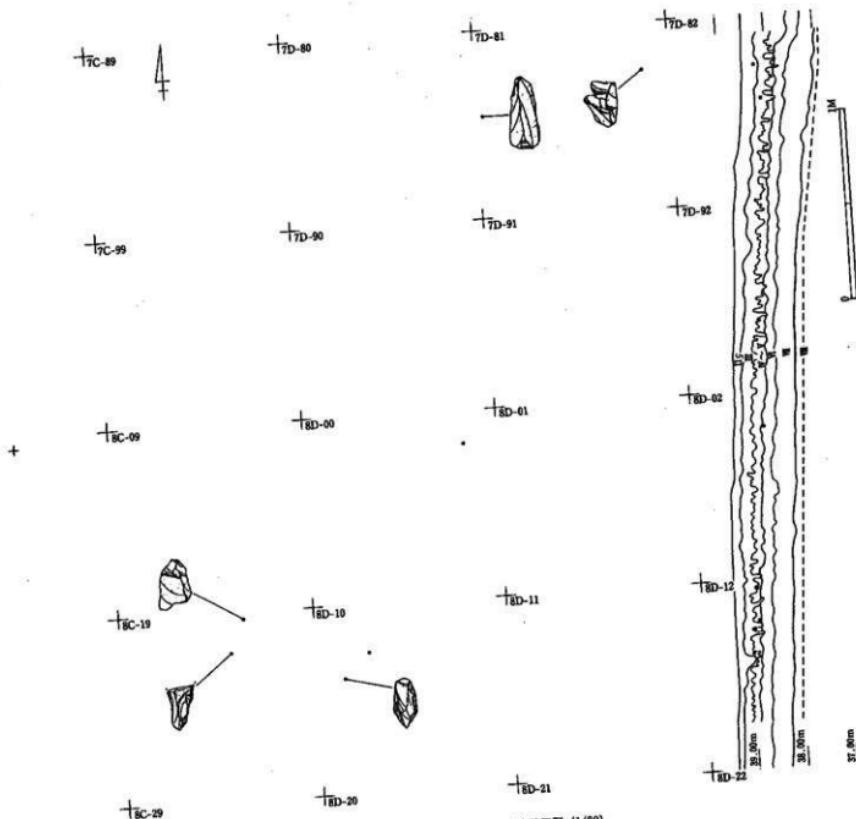
1、2共に縦長剥片を素材としたものである。1は表面に残る剥離から、同一あるいは同方向の打面より連続して押取された剥片であることがうかがえる。（ラベル記入層位IV～V層）

剥片（3～5）

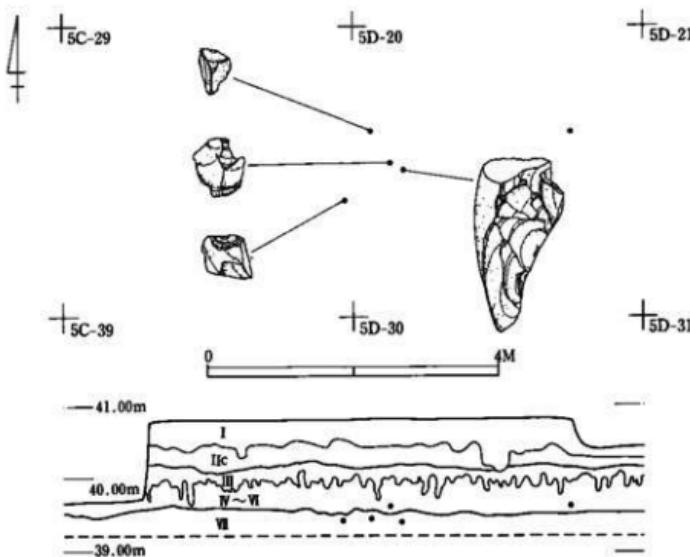
3点共縦長剥片であり、4に至っては剥片末端部が折断される。調整、使用痕は認められない。（ラベル記入層位 3・III層、4・IV～V層、5・IIc層）

接合資料（6a～d）

打面調整は認められず、一回の剥離により打面を作り剥片を押取しており、6bと6dは同一の打面をもつ。剥離は6a→6b→6cの順に行われている。



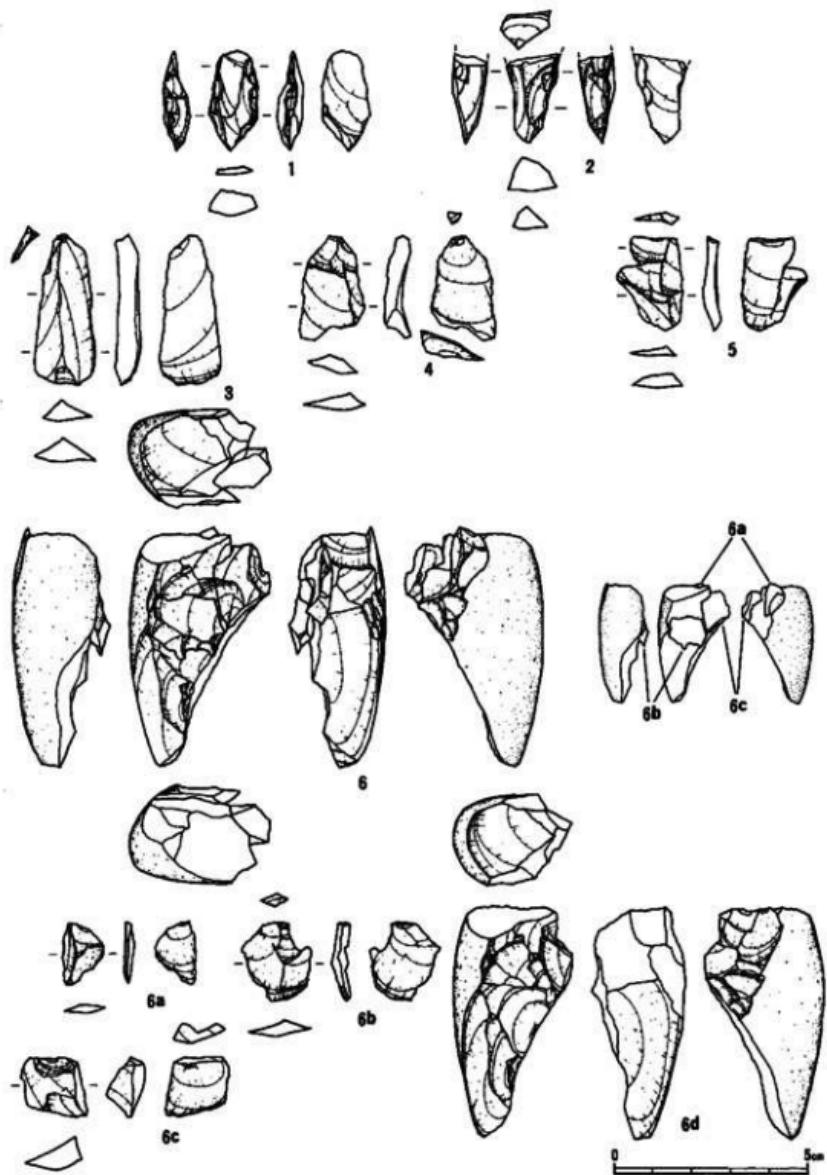
第7図 第1ブロック遺物出土状況図 (1/80)



第8図 第2ブロック遺物出土状況図 (1/80)

石器計測表

擇図 番号	遺物番号	器種	計測値				石質	備考
			長さ	幅	厚み	重量(g)		
1	8 D-10、1	ナイフ形石器	2.6	1.3	0.6	1.93	安山岩	二側縁加工
2	8 C-19、1	ナイフ形石器	2.3	1.4	0.9	2.07	凝灰岩	二側縁加工
3	7 D-81、2	剝片	3.8	1.6	0.7	3.47	安山岩	
4	8 C-19、2	剝片	2.7	1.7	0.6	2.16	安山岩	打面を残す。末端部折断
5	7 D-81、1	剝片	2.4	1.7	0.4	1.64	安山岩	打面を残す。
6		接合資料	6.1	3.6	2.5		安山岩	
6 a	5 D-20、3	剝片	1.6	1.1	0.3	0.44	安山岩	原石面を残す。
6 b	5 D-20、1	剝片	2.0	1.8	0.4	1.07	安山岩	原石面、打面を残す。
6 c	7 G-20、1	剝片	1.5	1.7	0.9	1.67	安山岩	打面を残す。
6 d	5 D-20、2	石核	5.9	3.1	2.4	41.62	安山岩	



第9図 先土器時代出土遺物 (2/3)

第2節 繩文時代

縄文時代の遺構は土壙、陥穴各1基のみ検出した。

005 (土壙) (第10図、図版5)

4F-04に位置し、上部をM-002に切られる。長径が1.20m、短径0.63mの橢円形プランを呈し深さ0.6mを計る。主軸方向はN-3°-E。壁の立ち上がりはほぼ垂直で底面は平坦堅緻である。伴出遺物はない。

006 (陥穴) (第10図、図版5)

5D-30に位置し、上部をM-014に切られる。長径は2.23m、短径1.70mの卵形の上端プランを呈し、深さ2.8mを計る。主軸方向はN-78°-W。掘り方中位で中ぶくらみとなり底面に向かって緩く傾斜しながら収束するが、基底部直前で垂直におちる。底面は平坦な長方形を呈し堅緻である。覆土中位以下はロームブロックを多量に混入するしまりのない層が底面まで続き、一時期に埋没したことを見ている。伴出遺物はない。

包含層出土遺物 (第11・12図、図版13・14)

調査面積は広域に及ぶが、縄文土器の出土地点は調査区北東隅に片寄り2E、2F、3Fが主体をなし、縄文後・晩期が大半を占める。出土層位はII層内であるが、晩期後半の遺物はIIb層（新規テフラを含む層）上部から出土している。なお、遺構に伴うものはない。

出土遺物は、少量ながらも各期に渡り早期から晩期まであるが、後期及び晩期が支配的である。早期は撚糸文系、沈線文系、条痕文系土器が、前期では黒浜式、興津式、十三坊塔式が、中期では加曾利E式、後期では加曾利B式、曾谷式、安行式が、晩期は安行式、姥山式、前浦式、千網式が認められた。

各期の土器は以下に示すとおりである。

第1群土器 (第11図1～3)

早期の土器を一括したが、撚糸文、沈線文、条痕文の3点のみである。

1は撚糸文系土器で、若干ふくらむ程度に肥厚した口縁部破片で、縦方向にRL縄文を施している。

2は内湾する口縁部破片で、口唇部は平坦となり、その両側に細かく連続した刻みを施す。口唇直下には2条の平行沈線を、さらに間隔をあけてもう1条の平行沈線を施す。その間は斜行する貝殻復縫文を充填し、縦方向に区画する沈線も見られる。

3は纖維を含みざらっとした胎土で、表裏とも貝殻条痕文を施す脣部破片である。

いずれも小片であるが、1は夏島式に、2は三戸式に、3は茅山式に比定されよう。

第II群土器（第11図4～8）

前期の土器を一括した。

4は胎土に纖維を含み、網目状燃糸文を施す。東北地方円筒系の影響を受けているものと推測される。

5～7は沈線区画内に貝殻復縁を押す土器で、5は器面が荒れているため明瞭さに欠けるが、直線と曲線の組み合わせた沈線区画内に、連続した貝殻復縁と八の字形の連続した刻み目文を配している。6は曲線と貝殻復縁文、7は直線内（三角形か菱形）の無文帯をかこむよう連続した貝殻復縁文を施す。

8は貼付紐上を竹管工具による連続した爪形文を施した胴部破片で、屈曲した口縁に至るようである。

4は黒浜式、5～7は興津式、8は十三坊塔式に比定される。

第III群土器（第11図9～18）

中期後半の土器を一括した。

9は口縁部付近の破片である。上下2つのやや乱れた渦巻隆蒂文による文様が描出され、地にLR縄文が施される。

10、11は恐らく9と同一個体で、渦巻隆蒂文から横に延びる隆蒂文により文様区画されている。やはりLR縄文を地文としている。

12はLR縄文を地文に、太い平行沈線文を横走させる。

13、14はRL縄文を地文として垂下する2条の沈線を施す。その間を14は地文を残し、15は磨り消して無文帯をつくっている。

16～18は縄文のみを施す深鉢片で、17がRL、他はLRである。

以上、第III群土器は加曾利E II式に比定できよう。

第IV群土器（第11図19～36、第12図37～46）

後期の土器を一括した。加曾利B式、曾谷式、安行式がある。

19、20はくびれ部から内湾気味に外反する口縁部破片で、横走する沈線で無文帯と縄文帯に分けている。縄文はRLである。無文帯はあまりきれいに磨かれていない。

21、22は沈線文をもつ浅鉢片で、21は斜行沈線、22は斜行沈線が直交している。

23は無文浅鉢の口縁部破片で、器面は丁寧に磨かれる。

24、25も無文の口縁部破片である。

26は口縁部に紐様文を1条めぐり、体部に粗いLR縄文を施す。紐様文は粘土紐に垂直

方向に押擦せず、下から上に向かっておさえるように押し上げるため、上部が波状をなす。

27～34は口縁部に紐様文を1条めぐり、体部のRL繩文の上に斜行沈線を描くもので、口縁内面には浅い1条の沈線をめぐる。27～29は口縁部破片、30～34は胸部破片である。

35、36は粗いLR繩文を施す深鉢の口縁部破片である。

37は弧線文を施す口縁部付近の破片である。

38～45は口辺部に刻み目をもち、体部に条線文を施す深鉢である。41は体部に爪形の刻みをもつ粘土紐を貼付している。

19～36は加曾利B式に、37は曾谷式の深鉢、38～45は安行I・II式に比定される。

第V群土器（第12図46～65）

晩期の土器を一括した。安行IIIa式、姥山式、前浦式、千網式がある。

46はやや内湾する口縁部破片で、条線文が施される。

47は精製深鉢形土器で、口唇部に刻み目をもち、帯繩文の施される波状を呈す口縁部である。

48～51は口辺に爪形の刻み目文が横走し、体部は斜行条線文を充填する。

52は帯繩文を施す口縁部破片である。

53も口縁部に帯繩文を施すもので、太い沈線で無文部と区画される。

54は表裏に2条づつの平行沈線文を施す浅鉢形土器である。

55～65は燃糸文を施す深鉢で、口縁直下は横位に、肩から脇部にかけては右傾斜から縱方向へ燃糸文が走る。55～65は同一個体と思われ、底部付近の64、65は燃糸文もまばらとなり無文部がみられる。

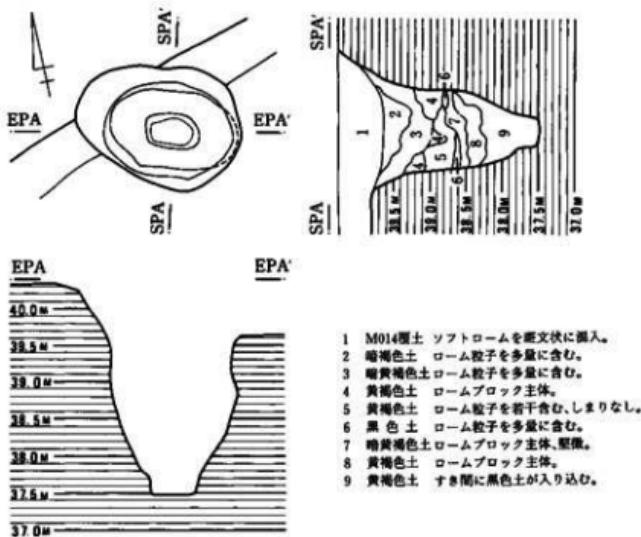
以上、47～52は安行IIIa式に、46は姥山II式に、53は前浦式に、54は千網式の浅鉢、55～65は千網式の深鉢に比定されよう。

石器（第12図66～68）

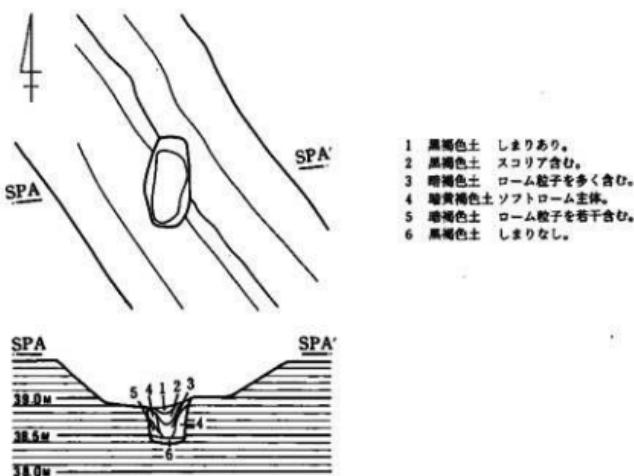
削器と石鎌が出土した。

66は縦長剥片を素材とする削器である。石材はチャートで、打面は平坦打面であり、頭部調整はない。右側刃に連続的に調整加工が施されている。先端部は調整加工時の折れと思われる。繩文時代の石器であろうが、先土器時代の可能性もある。

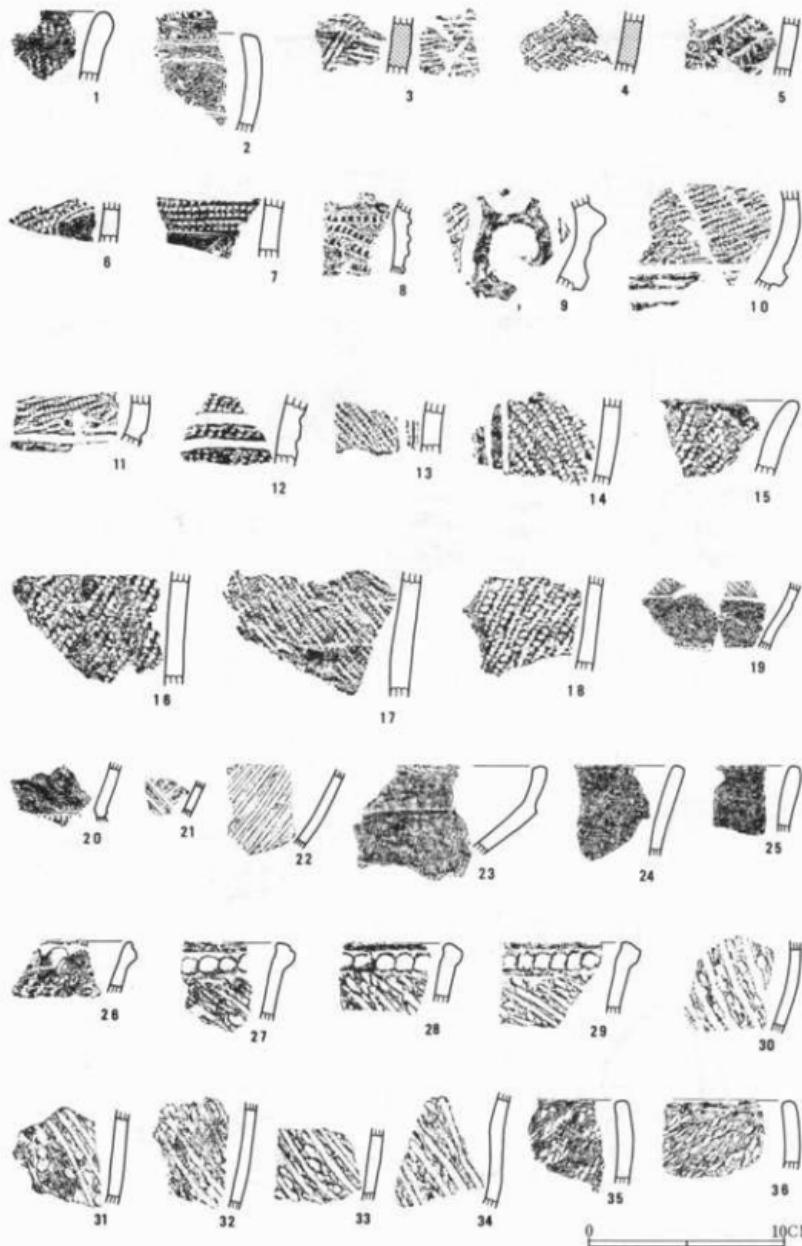
67、68は石鎌である。67は黒曜石製で、脚部の片方と先端部を欠く。68は安山岩製で、先端部を若干欠いている。



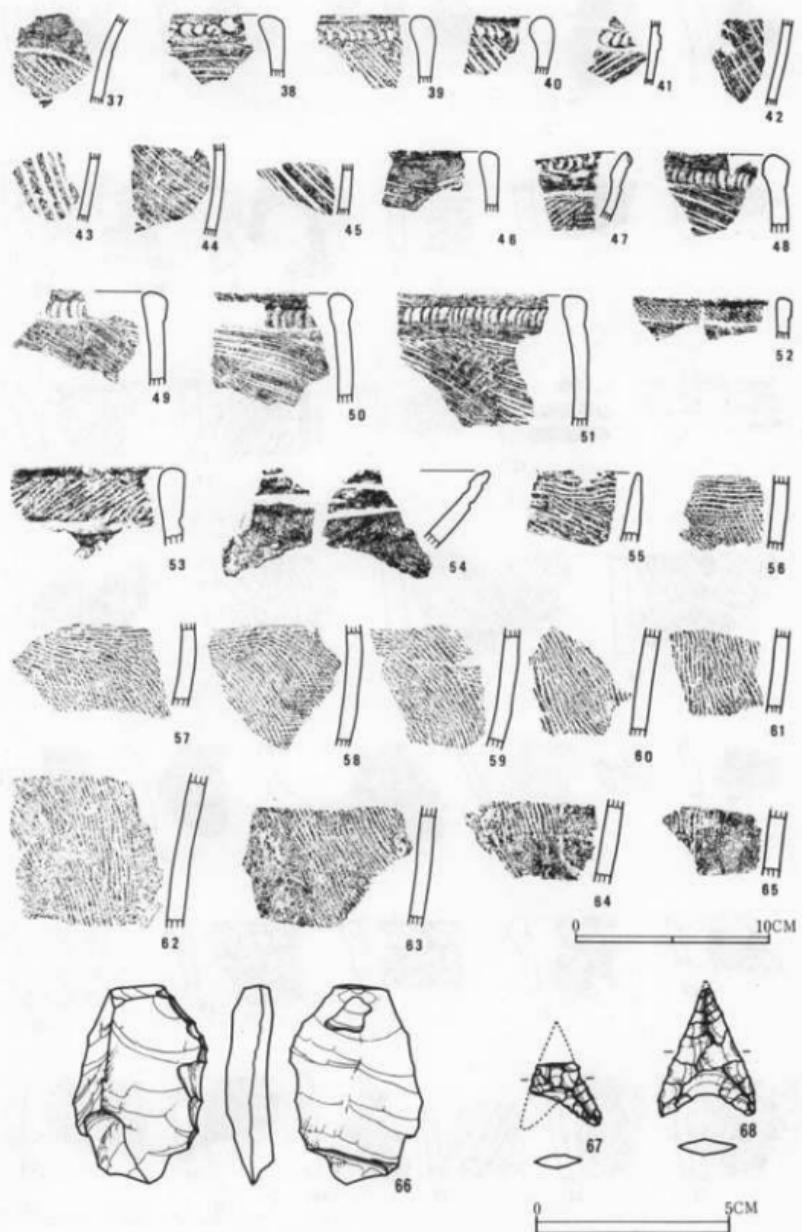
0 4M



第10図 桶文時代土壤(005,006)実測図 (1/80)



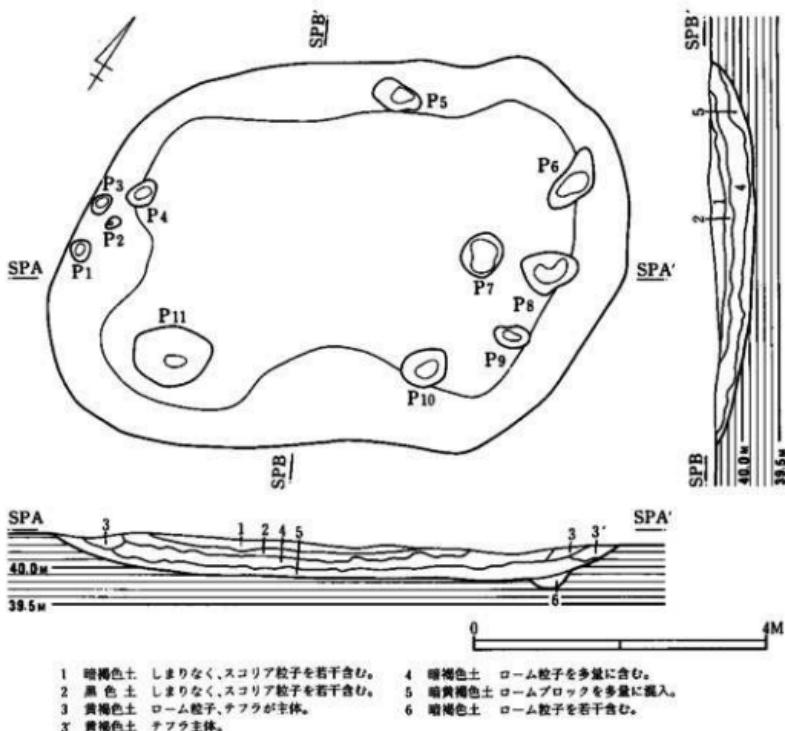
第11図 包含層出土繩文土器拓影図 (1/3)



第12図 包含層出土縄文土器拓影図及び石器実測図（1/3、2/3）

第3節 近世

本遺跡は近世の遺構が主体で、竪穴状遺構4基、土手、溝を検出している。

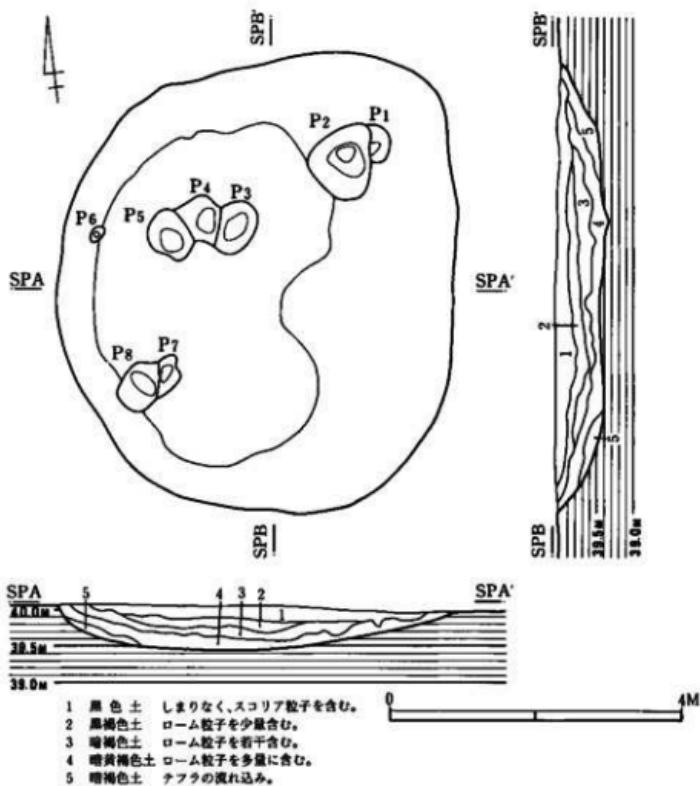


第13図 001号竪穴状遺構実測図 (1/80)

001 (竪穴状遺構) (第13図、図版6)

3E-24~26、34~36に位置する。

長径8.0m、短径5.2mの不整横円形プランを呈し、深さ55cmを計る。長軸方向はN-58°-Eである。掘り方は浅い皿状をなし、壁の立ち上がりは緩いスロープとなり、底面との境いが不明瞭である。底面は凸凹でしまりなく、焼土等は認められなかった。ピットは壁寄りで11ヶ検出した。東壁側に4ヶ、西壁寄りに径50cm程のものが6ヶ、さらに東南隅に径1m程の大形なものがある。それぞれの深さは、P₁が13cm、P₂が7cm、P₃が6cm、P₄が7cm、P₅が20cm、P₆が30cm、P₇が15cm、P₈が21cm、P₉が14cm、P₁₀が20cm、P₁₁が38cmで、総じて浅く不整形で、不規則な配置であり上屋をもつ柱痕等とは考えにくい。遺物は認められない。



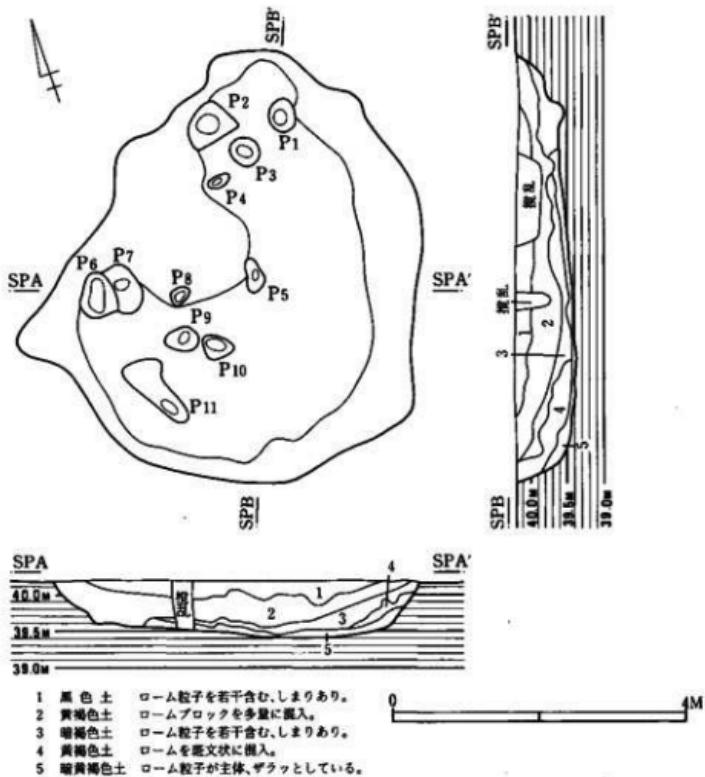
第14図 002号竪穴状遺構実測図 (1/80)

002 (竪穴状遺構) (第14図、図版6)

3E-87, 88, 97, 98に位置する。

長径6.3m、短径5.5mの不整橢円形プランを呈し、深さ60cmを計る。長軸方向はN-7°-Eである。掘り方は浅い皿状で、西壁は緩傾斜ながらも底面から良好に立ち上がるのに対し、東壁は非常に緩く、下端ラインは東に開く馬蹄形状を示す。底面は凸凹でしまりがなく、焼土等は認められなかった。ピットは8ヶ検出したが、北東コーナー、底面北側、南東側とで互いに2~3基づつ重複している。それぞれの深さは、P₁が11cm、P₂が41cm、P₃が33cm、P₄が20cm、P₅が34cm、P₆が10cm、P₇が20cm、P₈が20cmで、不整形で不規則な配置をとっていることから、001同様に上屋を乗せた遺構とは考えにくい。

覆土は自然堆積で、伴出遺物はなく時期は不明である。



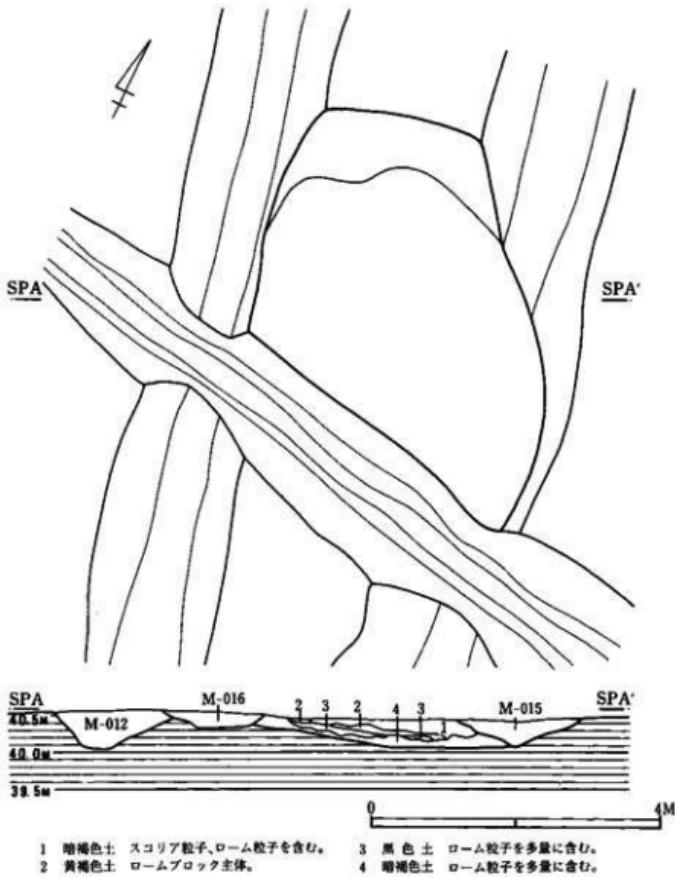
第15図 003号堅穴状遺構実測図 (1/80)

003 (堅穴状遺構) (第15図、図版7)

4F-91、92、5F-01、02、11、12に位置する。

長径5.9m、短径5.4mの不整形卵形プランを呈し、深さ84cmを計る。長軸方向はN-19°-Wである。掘り方は、001、002にくらべしっかりしており、壁の立ち上がりも中央部へ緩い傾斜で入り込む北西壁を除いて良好である。下端ラインは北西に開く馬蹄形状を示す。底面は凸凹で焼土等は認められなかった。ピット11ヶ検出したが、すべて西側に片寄り、大きさもまばらである。それぞれの深さは、P₁が8cm、P₂が17cm、P₃が14cm、P₄が22cm、P₅が20cm、P₆が16cm、P₇が18cm、P₈が20cm、P₉が26cm、P₁₀が13cm、P₁₁が19cmと浅く、配置も不規則で柱痕と思われる良好なピットはない。

覆土上部は人為的埋土で、下部もロームの混入が多い。伴出遺物はなく時期は不明である。



第16図 004号堅穴状遺構実測図 (1/80)

004 (堅穴状遺構) (第16図、図版7)

5D-46, 47, 56, 57に位置し、東側をM-015に、西側をM-016に、南側をM-012に切られる。南北4.2m、東西4.4mが残り、下端ラインから構円形のプランを呈すと思われる。深さは40cmを計る。掘り方は浅い皿状で、壁の立ち上がりも緩い。ピット等は検出されなかった。覆土は、中位にロームブロック層が10cm程の厚さで認められる。人為的に埋めたものか。なお、伴出遺物はなく時期は不明だが、切り合ひ関係からM-012、015、016より古いことが判明した。

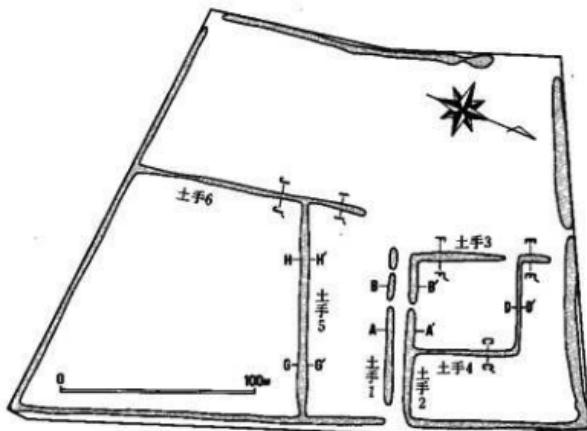
敷地外縁部及び内部の土手

敷地外縁を全周する土手の内部は、西半を1区画、東半を4区画する土手がめぐる。

外周部北辺の土手は、2m強の高さがあり基底面の幅も7m前後とひときわ目を引く規模をもち、その中程では出入口としたのか高さを減ずる地点がある。なお、この土手は、遺跡東辺を通る県道成田～松尾線を横切り、東方に延びて取香拂込跡まで続いているものと考えられる。この北辺の土手にくらべ、東・南・西辺の土手は70～80cmの高さしかなく基底面の幅も3m前後で前者とは対照的な規模となっている。なお、北西コーナー付近は、隣接するテニスコート造成時に壊したようで切れているが、本来は繋がっていたものと考えられる。現在でも多少周囲より高まりが残っている。南西コーナーも後世の出入口となつたのか、土手が切られている。

敷地内部は、東辺やや北寄りから西方に2条平行して延びる土手（南側を土手1、北側を土手2とする）と、土手2の先端から折れて北辺に向かう土手3により方形の空間をつくり、さらにその内部を小さな正方形と鍵の手形に区画する土手4がある。土手1の45m南側には東西に延びる土手5が南辺から延びる土手6とぶつかり、南側には外周部南辺、東辺、土手5、6にかこまれる大きな台形、北側には外周部東辺、土手1、5、6にかこまれる長方形の2つの区画をつくっている。なお、西半部は広範囲な空間が展開しているが、その北側は台地上に、南側は谷地にあたり、後者の土手6沿いの斜面部は削平整形している。

以下、それぞれの土手について説明する。



第17図 土手配置図 (1/1,500)

土手1（第18図、図版10、11）

東西方向に延び、全長80mあるが東から50m、65mの2か所で切断されている。また、東端は外周部東辺と接し、8m程の間隔がある。土手の規模は、基底面の幅が4～5mで見かけの高さは1.5m程、旧表土面から0.8～1mを計る。盛土はIIa層を基底面として、下部にテフラ混りの暗褐色土を、上部にはロームを順次積み上げる。土手断面形はやや扁平な逆三角形となる。

土手に伴う溝（M-004）は南裾に平行し、上端幅2.1m、深さ25cm、皿状の断面形を示す。この溝はB-B'セクション付近で一担切れる。

土手2（第18図、図版11）

土手1の5～6m北側を平行して東西に延び、西端は折れて土手3に、東端は外周部東辺と接する。全長88mで、やや西寄りに切断部があり、土手1の切断部と対応する。土手高はこの切断部付近が最も高く、見かけで北側平坦面から1m、南からは土手1と2の間に低く削られているため1.5m、旧表土面からは1mを計る。基底面の幅は4m前後である。盛土はIIa層を基底面とし、下部に暗褐色土、上部にロームを積み上げる点は土手1と共通する。断面形もやや扁平な逆三角形から塊形を呈す。土手に伴う溝は認められない。

なお、土手南裾に道路状の堅くしまる部分があり、土手1と土手2の間は当初より道路としてローム上面まで削平してあったものと考えられる。

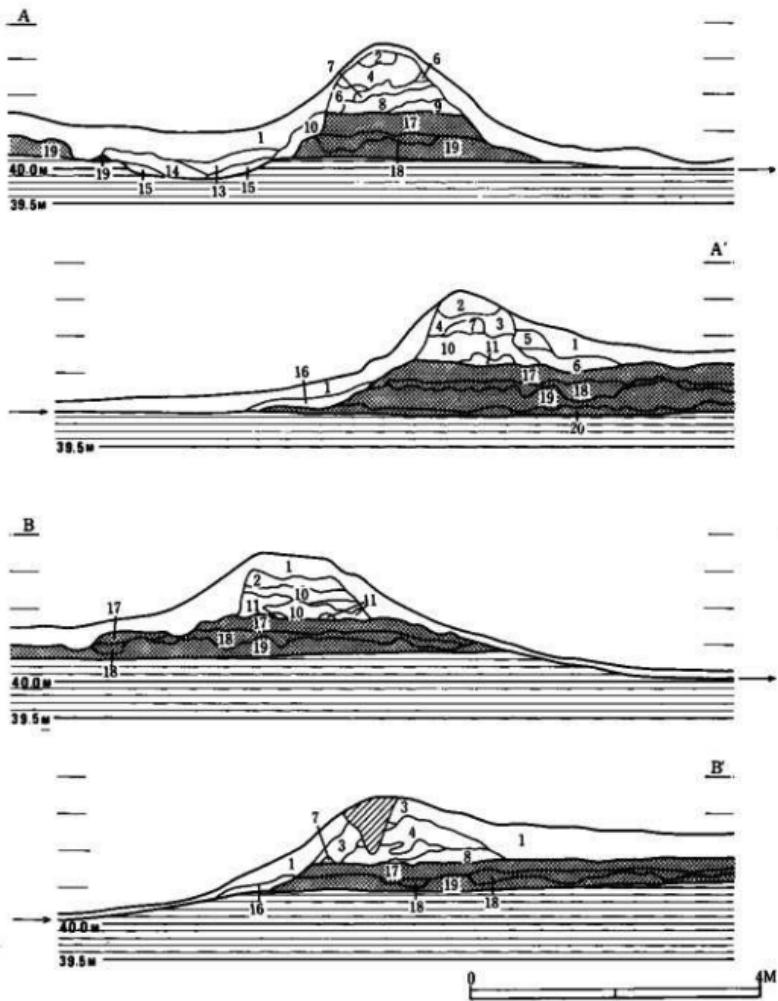
土手3（第19図、図版12）

土手2の西端から折れて北に向かい、土手4と接する地点で一担低くなるものの外周部北辺直前まで延びる。基底面の幅は3～3.5m、見かけの高さは0.8～1mで、土手2から北に向かうにつれて低くなる。旧表土面からの高さは0.7～1.3mを計る。盛土はIIa～IIb層を基底面として積み上げる。土手2に近い南寄りではF-F'セクションの観察から、基底面に黒～暗褐色土を積み、さらに土手高を増すためローム混入土を上部に乗せている。断面形は、土手が低いため塊～皿状を呈す。

土手に伴う溝（M-017）は西裾に平行して上端幅1m、深さ50cm、半円形の掘り方を示す。なお、この土手の西側平坦部は、多少削平されているため溝西側の立ち上がりは低い。

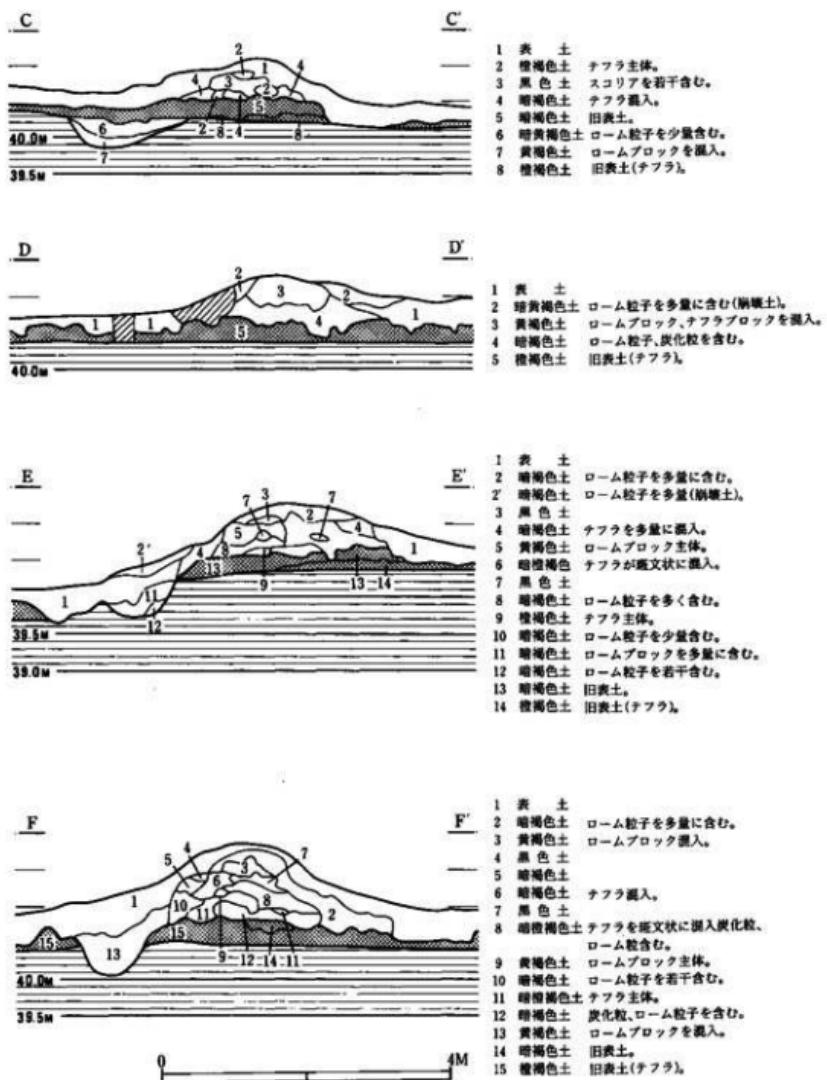
土手4（第19図、図版12）

土手2、土手3、外周部北辺、東辺に囲まれた方形区画内をさらに小形な方形と鑓の手形に区画する土手で、土手2から北へ52m、西に折れ48mで土手3に到達する。基底面の幅は3m弱、見かけの高さは低く40～50cm、旧表土面からも50cm前後とかなり低い土手である。盛土はIIa層を基底面とし、部分的にローム混入土を認める程度で、ほとんどII層の暗褐色土を主体と



- | | | |
|---------|----------|-----------------|
| 1 表 土 | 11 暗褐色土 | 泥化粒、ローム粒子を多く含む。 |
| 2 黄褐色土 | 12 暗褐色土 | ロームブロックを若干混入。 |
| 3 暗黄褐色土 | 13 暗褐色土 | 泥化粒、ローム粒子を若干含む。 |
| 4 黄褐色土 | 14 黑褐色土 | 泥化粒を多量に含む。 |
| 5 喀灰褐色 | 15 暗黄褐色土 | ロームを斑状に混入。 |
| 6 暗褐色土 | 16 黑褐色土 | 角礫を混入し堅微(道路状)。 |
| 7 黑褐色土 | 17 暗褐色土 | 旧灰土。 |
| 8 暗褐色土 | 18 暗褐色土 | 旧灰土。 |
| 9 暗褐色土 | 19 暗褐色土 | 旧表土(チフラ)。 |
| 10 黑褐色土 | 20 黄褐色土 | 田層(ソフトローム)。 |
- } 墓覆土。

第18図 土手1・2 土層断面図 (1/80)



第19図 土手3・4土層断面図 (1/80)

している。したがって、断面形は高さがない皿形の形状を示す。また、土手に伴う溝は認められなかった。

土手5（第20図、図版12）

外周部東辺の中間から西へ110m延び、土手6に連する。中間部やや東寄りが最高部で、東辺及び土手6に向かって徐々に低くなる。基底面の幅は3～3.5mで、見かけの高さは最高部で80cm、土手6との接点では50cm程で、旧表土面からの高さは60～70cmを計る。盛土はIIa層を基底面とし、II層を主体に積み上げている。断面形は中央部の高い地点では逆三角形、両端の低い地点では皿状を呈す。

土手に伴う溝（M-018）は南裾に平行して認められ、土手の高い地点では幅も広く1.2m、深さ40cm、低い地点では幅70cm、深さは25cm程である。

土手6（第20図）

外周部南辺のやや西寄りから浅い谷を横切り北へ120m延び、途中で土手5と接する。土手の西側では、谷に向かう傾斜面が若干削平されるため、土手の高さをきわ立たせている。基底面の幅は2.5m前後、見かけの高さは50～60cmだが、西側削平部からの比高差は1.7m程となる。旧表土面からの高さは50～60cmを計る。盛土はIIa層を基底面としている。断面形は塊～皿形である。

土手に伴う溝（M-015、016）は両裾に平行しており、東側のM-015は幅1.5～2m、深さ30cm程、西側のM-016は幅1m、深さ30cm程である。この溝は、谷部においても認められた。

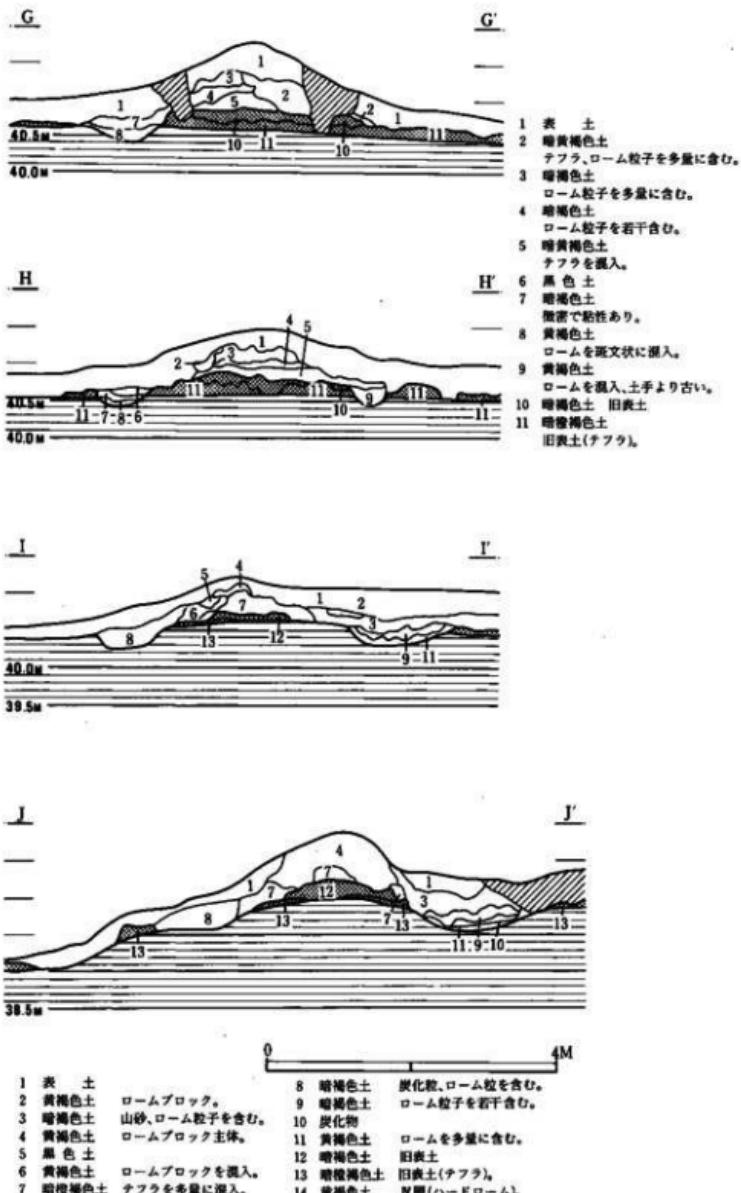
土手に伴う溝（M-004、015、016、017、018）

内部を区画する土手のうち、裾に溝（堀）をもつものは、土手1、3、5、6の4条で、土手6は両裾、他は片裾にある。

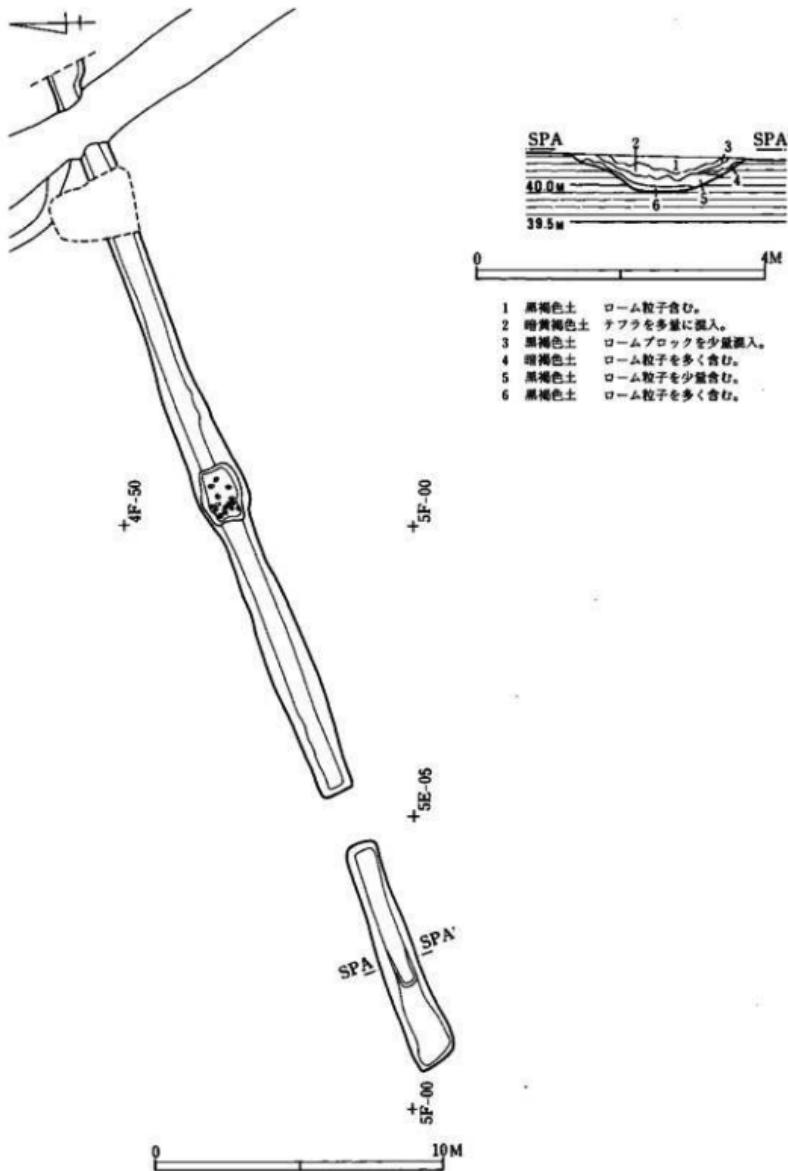
以下、それぞれの溝について説明していく。

M-004（第21図、図版10）

土手1の南裾にあり、全長74m強（東端部は調査区外のためさらに延長する）で、途中3.5m程の陸橋部があり、東西に2分される。西側の溝は、長さ16.5m、幅は東部で2.2m、西部で3mを計り、中央西寄りで15cm程の段差がある。段の東側は深さ45cmの断面形台形を、東側は深さ30cmの断面形皿形の形態をとる。なお、西端は土手1の西端と一致する。東側の溝は、長さ54mであるが、さらに未調査区の東方へ延びる。幅は広い所で3.6m、狭い所で2.3mとなり、西端部はほぼ方形におさまる。断面形は逆台形を示すが、溝中程には後世の擾乱が入る。基底



第20図 土手5・6 土層断面図 (1/80)



第21図 M-004実測図 (平面1/200、断面1/80)

面はほぼ平坦でハードロームに達している。なお、東端部でM-001～003を切る。

また、陸橋部で柵等の施設の痕跡の有無を確認するため精査したが、それらしい痕跡はなかった。さらに、土手切断部と陸橋部は対応せず、切断部下の溝が人為的に埋めもどされたような形跡もないことから、土手切断部は造築時からあったかどうかははなはなだ疑問であり、陸橋部がなぜ残されていたか理解に苦しむ。

M-015、016（第22図）

土手6の東裾にM-015、西裾にM-016がある。

M-015はやや蛇行しながらも土手6の東裾に沿い130m以上延びる。北端は土手2の延長線上まで達することが確認できた。幅はおおむね1.5m前後で、深さは40cm程である。ただ、南側の谷部周辺下は20～30cmと浅くなる。断面形は皿状を呈す所が多く、底面は凸凹である。

M-016もやはり蛇行しながら土手6の西裾に沿って100m以上延びる。北端部はほぼ方形に終結している。幅は1.5m前後で、深さは30cm前後と浅い。断面形は皿状を呈し、底面は凹凸が激しく、ピット状の小さな落ち込みが点在する。

M-015、016ともに004及びM-012、014を切る。

M-017（第23図、図版9）

土手3の西裾にあり、全長52m以上で外周部北辺に向かう。南端は、土手2、3の屈折部よりさらに4m程南に延び、土手1、2の中間まで達する。溝の幅は1.3m前後であるが、南端部は確認面が低いため上端幅で80cm程となる。溝の深さは、40cmで底面はほぼ平坦である。断面形は逆台形を示す。なお、北寄りの地点で小形な方形の小窪穴が認められたが、覆土がしまりなく、後世の擾乱壙であった。

M-018

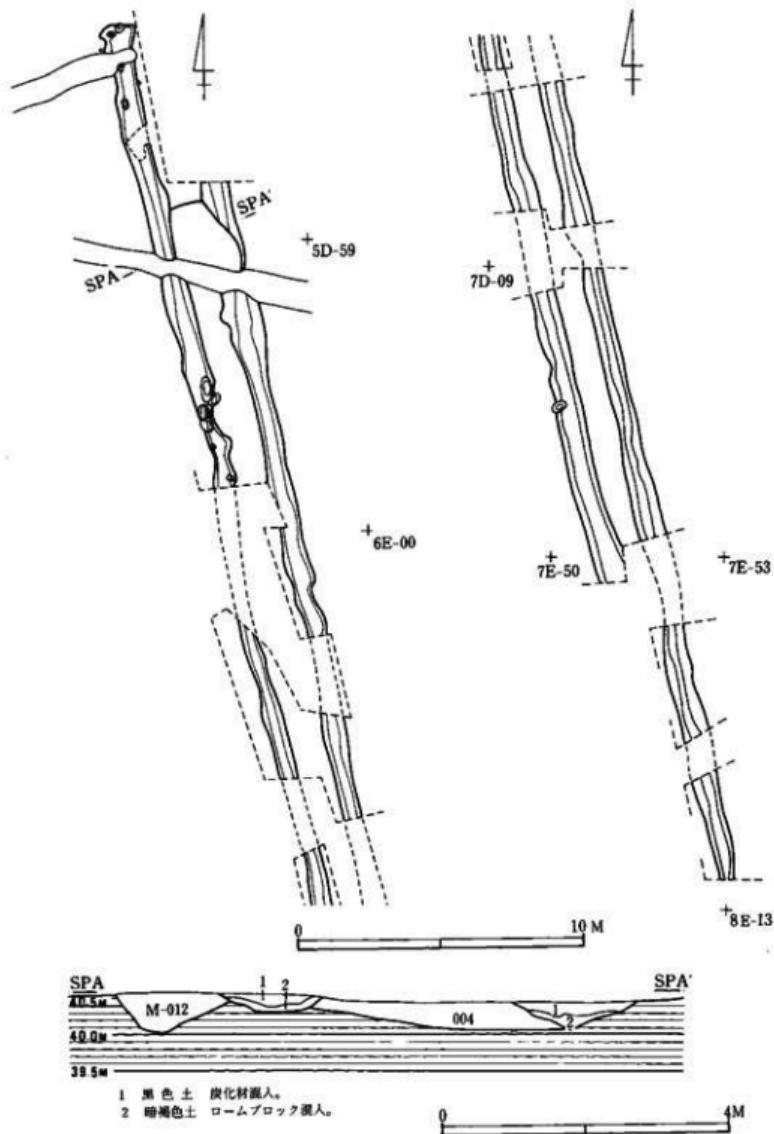
土手5の南裾にあり、部分的にしか確認できなかったため全容は不明瞭だが、ほぼ土手全長に及ぶと思われる。幅は1m弱で深さは20cm前後と浅い。断面形は皿状で、底面はローム直上にとどまり凹凸も激しい。M-005、008、009、011、012と切り合うが、本溝の方が新しい。

以上、土手に伴う溝は、他の遺構より新しく、土手も同様である。したがって、最終的な遺跡の姿は、後世の擾乱を除き、この土手と溝であるといえる。

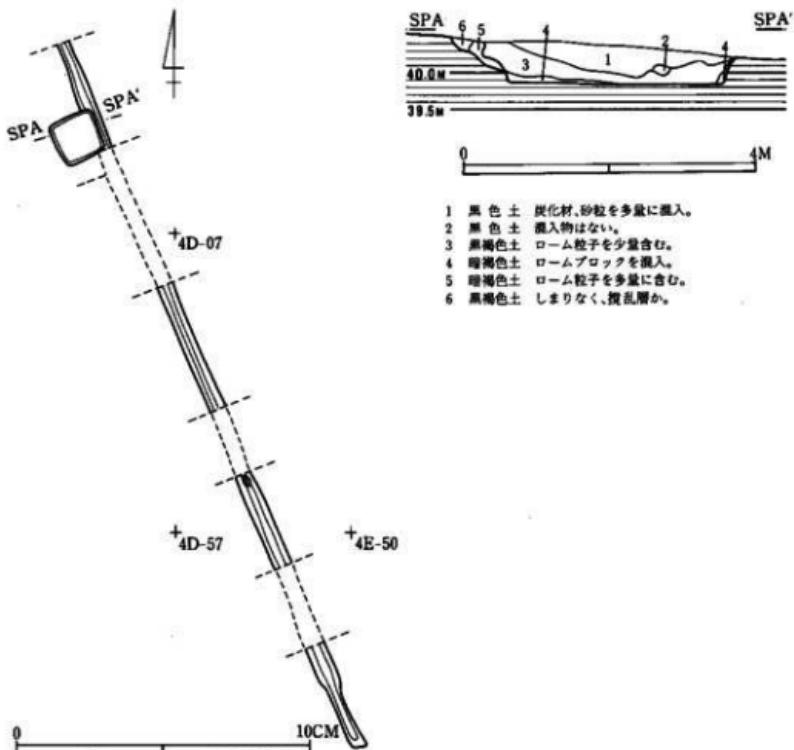
土手に伴わない溝（M-001～003、005～014）

M-001（第24、25図、図版8、9）

3F-03付近より南下し、3F-42で左へ屈曲して南東方向に延び、4F-36でM-002、003と合



第22図 M-015、016実測図（平面1/200、断面1/80）



第23図 M-017実測図（平面1/200、断面1/80）

流、接するように5G-22まで達し、さらに南へ延びる。全長110m程で、幅は2m前後を計る。西側壁は直線的に傾斜して基底面に至るが、東側壁は中段で幅15cm程の平坦面をつくったのち、基底面に移行する。基底部までの深さはおおむね70cm、中段までは40cm前後である。土層断面の観察から、中段下部と上部では時期差があり、下部埋没後、やや幅が広く浅い溝をつくっていることが判明した。恐らく、下部の溝が埋もれ切らない段階で上部の浅い溝をつくったものと考えられる。なお、上部の溝の基底面が堅くしまっていることから、道路として利用した可能性が強い。

M-002、003との切り合い関係は、M-001の下部が最も古く、M-003、M-001の上部の順となる。また、M-002はM-003より古く、M-001との前後関係は不明である。

M-002 (第24、25図、図版8、9)

2E-63から直線的に南東方向へ延び、5G-22に達する。全長130m、幅は北側で2.2m、南に向かうにつれ広くなり3m前後となる。西側壁は、M-001同様直線的に傾斜して基底面に至るが、東側壁では下部に段をもつところもみられる。基底部までの深さは、北側で40cm、南側では60cmと南に向かうにしたがって深くなる。所々にみられる段と基底部との比高差は10cm前後である。基底部は北側では凹凸があり、合流部から南側では平坦となる。

なお、3E-18付近では、溝の東側に平行して長さ10m、深さ10cm程のM-013が走る。これがM-002に付属するものかどうかは不明である。

M-003 (第24、25図、図版8、9)

2E-72からM-002の西側を湾曲しながらもほぼ平行しながら南東方向に延び、4F-02で一担3m程切れるが、再びM-002に平行して南下する。4F-36でM-001、002と合流し、5G-22まで延びる。全長130m程である。幅は北側の広い部分で約2m、平均して1.5m程である。深さは50cm程だか、切断部付近ではしだいに狭く浅くなる。切断部南側ではM-001、002との合流地点から急に深くなり、基底部はM-002より下位につくられる。この地点の東壁が緩傾斜なのに対して、西壁は急傾斜で基底部を西壁寄りに置く。断面形は左辺が短かく右辺の長い扁三角形を呈す。

M-005~010 (第26図、図版9)

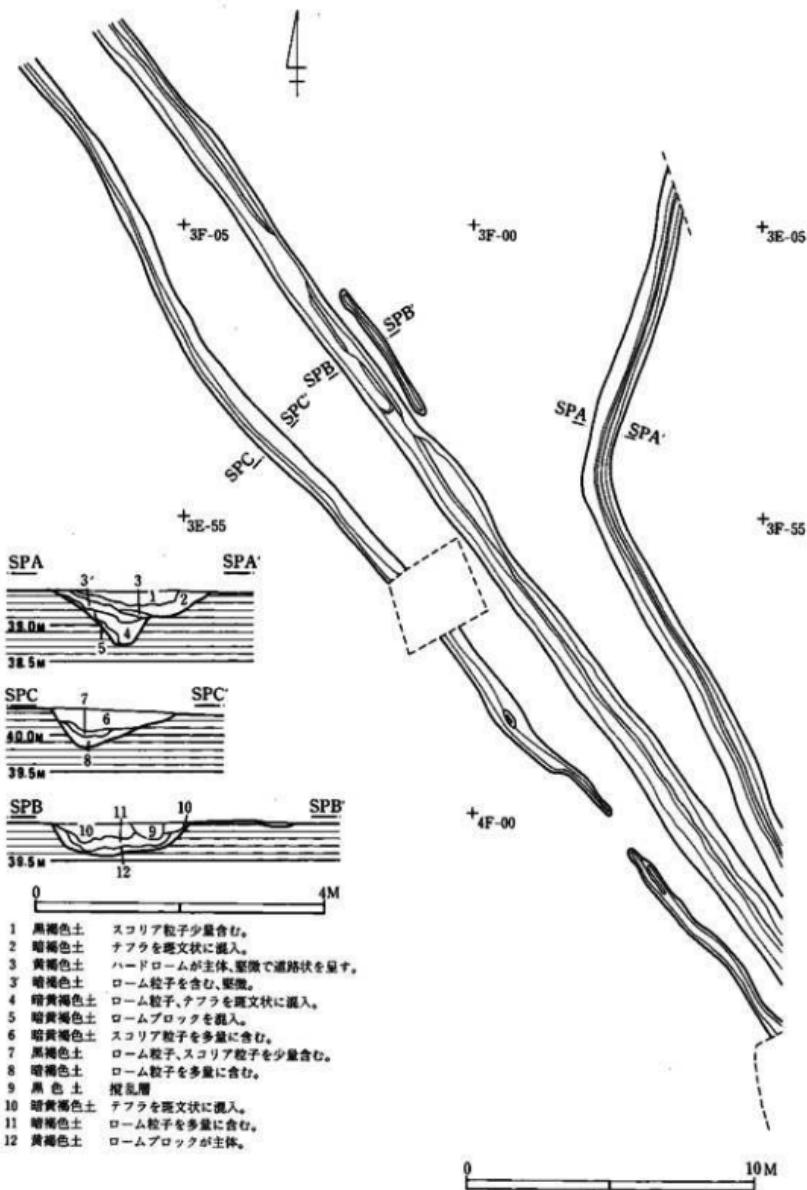
M-001~003の合流地点西側を平行して走る幅が狭く浅い6条の溝で、途中で切れたり交差し合っている。M-012と018の間では併列しながら南北に延びているため、この地点で番号を付した。M-018からM-004の間では切れ蛇行しており、北端ではM-010のみに収束している。覆土は堅くしまり道路状を示すことから、輪だちの可能性もある。ただし、時期的には土手よりも古い。

M-011 (第26図、図版9)

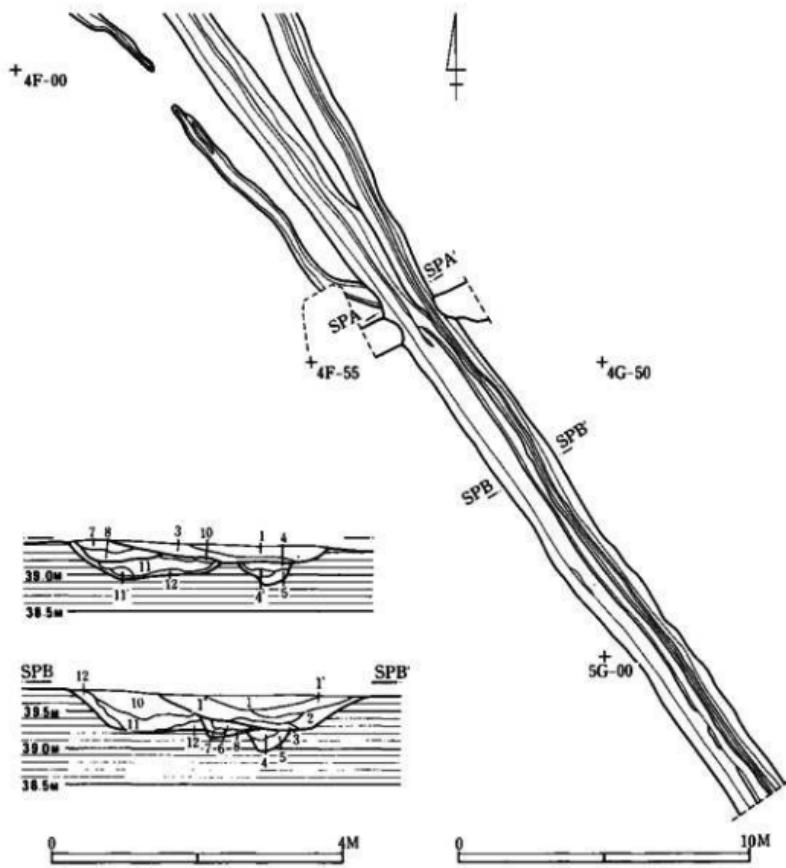
M-010と平行しながら6m程南下するが、徐々に南西方向に湾曲したのち、直線的に土手5の下を通り、土手6の方向へと延び谷に消えていく。全長は100mに達する。幅は80cm、深さは20cm前後である。断面形は扁三角形を示す。交差するM-012、018よりも古い。

M-012 (第27図、図版9)

5B-27から6G-05まで全長200mの直線的な溝である。幅はM-011とM-015の間が1.6mと広く、狭い所では1m、平均して1.4m程である。基底部までの深さは40cm前後で逆台形から逆

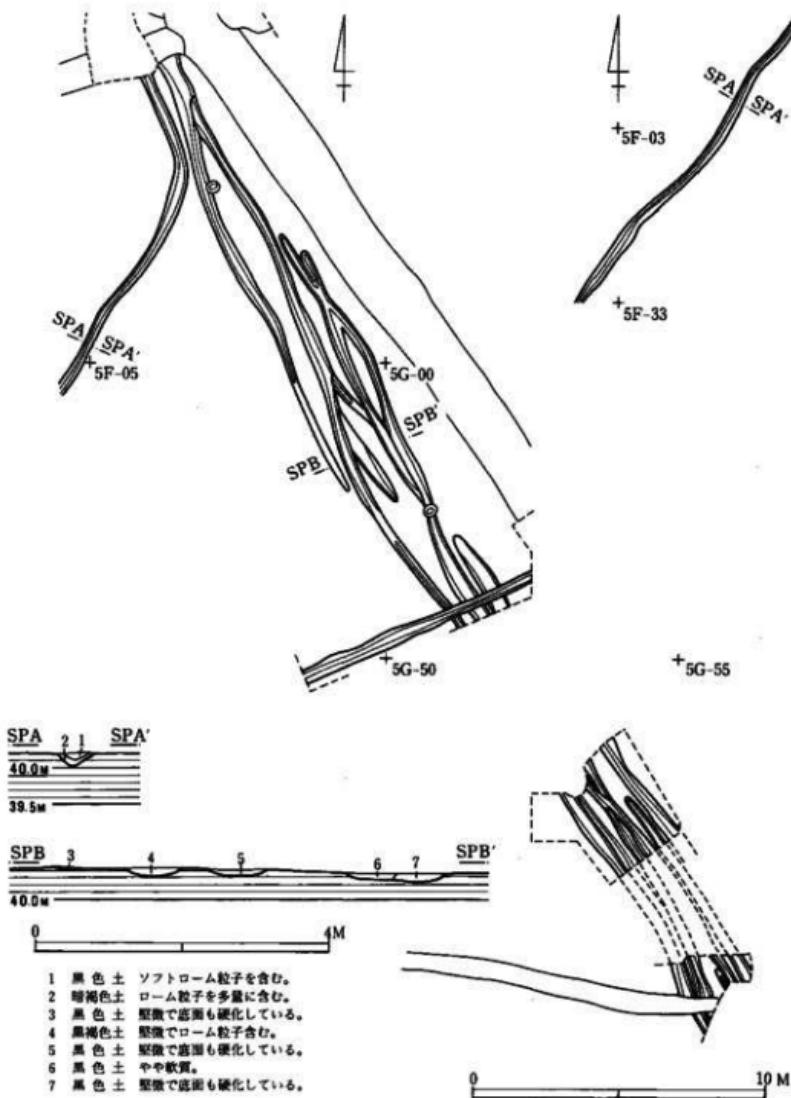


第24図 M-001~003実測図(1)(平面1/200、断面1/80)

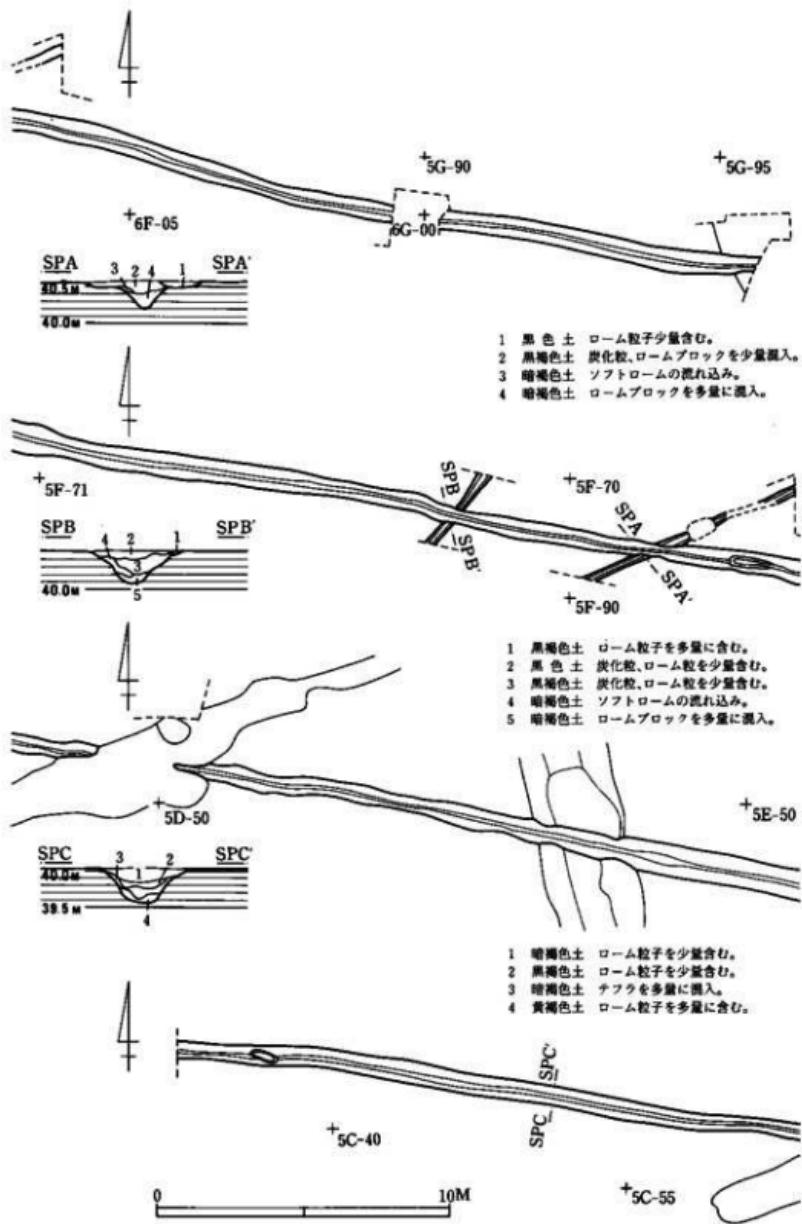


- | | | | |
|---------|--------------|----------|-------------|
| 1 黒褐色土 | 前ページ1と同じ。 | 5 暗黃褐色土 | 前ページ5と同じ。 |
| 1' 暗褐色土 | ローム粒子を多量に含む。 | 6 暗黃褐色土 | 前ページ6と同じ。 |
| 1' 暗褐色土 | スコリア粒子を少量含む。 | 7 黒褐色土 | 前ページ7と同じ。 |
| 2 暗褐色土 | 前ページ2と同じ。 | 8 暗褐色土 | 前ページ8と同じ。 |
| 3 黄褐色土 | 前ページ3と同じ。 | 10 暗黃褐色土 | 前ページ10と同じ。 |
| 4 暗黄褐色土 | 前ページ4と同じ。 | 11 暗褐色土 | 前ページ11と同じ。 |
| 4' 黑褐色土 | ローム粒子を含む。 | 11' 黒色土 | ロームブロックを混入。 |
| | | 12 黄褐色土 | 前ページ12と同じ。 |

第25図 M-001~003実測図(2)、(平面1/200、1/80)



第26図 M-005~011、018実測図（平面1/200、断面1/80）

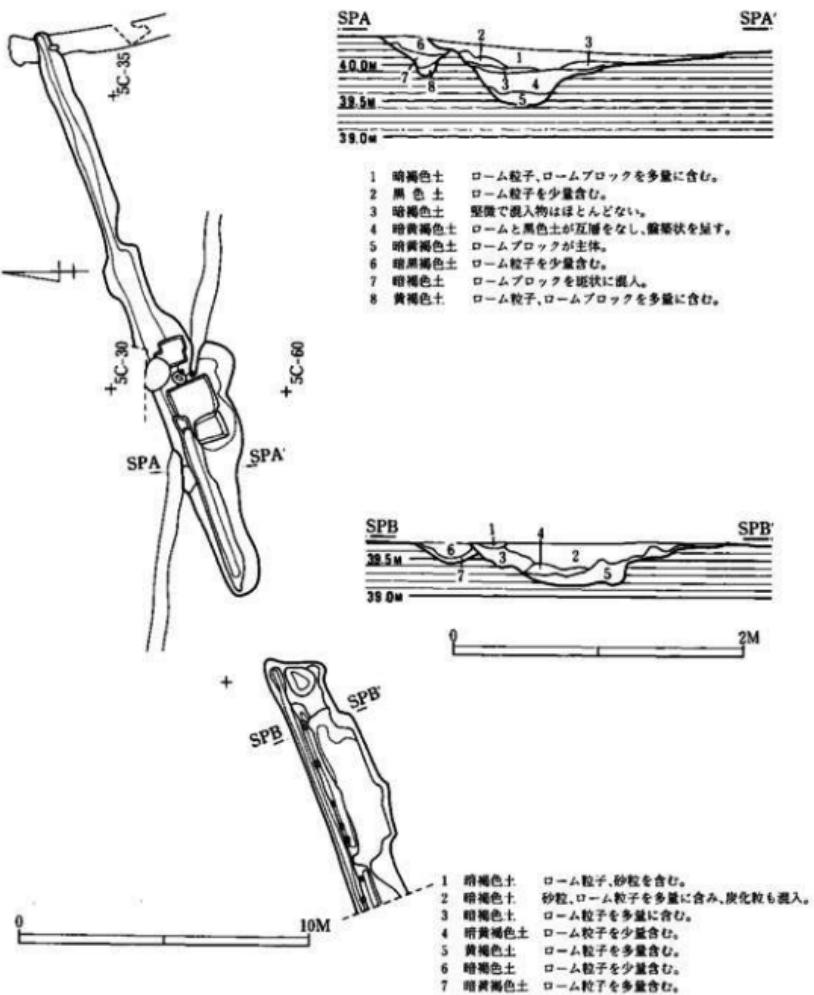


第27図 M-012実測図（平面1/200、断面1/80）

三角形の断面形状を示す。基底部では掘削時の際に使用した工具痕と思われる凹凸も見られる。途中、M-018、011、015、016、014及び004と切り合うが、M-011、004より新しく、他より古い。

M-014（第28図、図版9）

M-016の北端から土手2の延長方向に直線的に伸び、5C-70に至る。途中、5C-50付近で5m程の断絶部があり、東西に2分される。東側部分は中間でM-012と切り合うが、その周辺では方形や不整形な土壤群が掘り込まれ、溝の幅や深さを不鮮明にしている。土壤群は炭化物や灰、ローム等を多量に含む覆土で、溝埋没後に掘り込まれている。焼土や堅く床状にしまったところも見られることから、上屋構造をもつものであった可能性もある。このような後世の擾乱が入るため溝の形状ははっきりしないが、東端で幅1.8m、深さ30～35cm、西端では幅2.7m、深さ60cmを計り、基底部は北辺に片寄る。西側の溝は長さ18m、幅4.5mであるが、本来の溝は北辺部にあり、中央から南辺にかけては新しい切り合いであることがA-A'セクションからうかがえる。この新しい切り合いは、東側の土壤群と同時期と考えられる。したがって、本来の溝は幅1m前後、深さ30cm程である。この溝の南辺に沿って径20cm、深さ50～70cmのピットを8ヶ検出したが、このピット列は新しい掘り込みに関連するものである。このM-014は土手2の延長線上にあることから、土手の存在をかなり意識して掘られたものと考えられる。



第28図 M-014実測図（平面1/200、断面1/80）

第3章　まとめ　一房総の牧と御料牧場遺跡一

房総の牧

下総国の中南部には、広大な台地が広がり水の便は決して良い地とはいえない。野馬牧場もこの広大な荒地を利用し、古くは延喜式の中に下総牧の所在を伝える文面があり、高津、大結といった地名をうかがうことができる。ただ、本格的に整備されたのは江戸時代に入ってからで、幕府は当地に小金、佐倉牧を開設している。また、安房地方では戦国時代に里見氏が軍馬養成のため牧を設けたと伝えられ、一担断絶したものの、享保年間に江戸幕府が再度嶺岡牧を開設し積極的に牧経営に乗り出している。

小金牧は、高田台牧（柏市高田、松ヶ崎、花野井、十余二、流山市駒木、野田付近）、上野牧（柏市街付近）、中野牧（松戸市五香、六実、鎌ヶ谷付近）、下野牧（習志野原付近）、印西牧（印西町十余一付近）の5牧からなり、一方佐倉牧は、内野牧（富里町七栄、新木戸付近）、高野牧（富里町高野、新井田新田付近）、柳沢牧（八街町市街付近）、取香牧（成田市取香、三里塚、芝山町岩山付近）、小間子牧（八街町四木開墾付近）、矢作牧（多古町十余三、久賀付近）、油田牧（栗源町岩部、上野台付近）の7牧からなっている。嶺岡牧は、西一牧、西二牧、東上牧、東下牧、柱木牧の5牧である。



第29図 小金、佐倉両牧位置図

江戸時代の牧

1. 牧の管理、運営

江戸時代初期慶長年間に幕府は下総に小金、佐倉の両牧を開設しており、初代野馬奉行綿貫夏右衛門が家康に召されて以来、代々綿貫氏が野馬奉行を世襲し牧の管理にあたることとなる。

小金牧は、当初より綿貫氏が幕府の命で管理にあたるが、江戸時代中期享保年間に南部（中野牧、下野牧）と北部（上野牧、高田台牧、印西牧）に分割し、南部を関東郡代の管轄とし金ヶ作に陣屋を設け、北部は従来通り綿貫氏の管理するところとなった。また、佐倉牧は内野牧、柳沢牧、高野牧の3牧が佐倉城主のもとにおかれ、城主方あるいは三牧方と呼ばれ、小間子牧、取番牧、矢作牧、油田牧の4牧は綿貫氏があずかり、小金方あるいは四牧方と呼ばれた。

牧管理の構成は、佐倉四牧を例にとると、江戸野馬役所の支配下に小金の綿貫夏右衛門以下、牧士7名、牧士並4～5名、牧士見習（牧士の血縁者で将来牧士を繼ぐ者）4～5名、馬医1名、勢子廻4名、網掛2名、捕手13名で構成され、幕府から俸禄を受けていた。また、野付村と称する周辺の農村209ヶ村の農民も手伝いに当たっている。

牧経営の一大行事は野馬の捕獲であるが、小金牧では春、佐倉牧では秋（旧暦7～8月）に行なわれるのが通例で約40日前後の日数をかけている。また、嶺岡牧では3月下旬から4月にかけて行なわれている。佐倉牧では野付村から数百人の勢子人足がかり出され、牧士や勢子廻の指揮のもとで3m程の竹竿や棒をもち、闇の声をあげながら広大な牧から捕込へと野馬を追い込んでいく。込場では頭數、種別を調べ、野返しする馬、江戸の野馬役所や佐倉城主に供する馬、払い下げる馬などを選別した。また、捕馬の際には各牧の焼印が捺された（第30図）。

小 金 五 牧 野 馬 焼 印						
上 野 牧	高 田 台 牧	印 西 牧	中 野 牧	下 野 牧		
笠	琴 柱	瓢 箕	千 鳥	輪 達		
佐 倉 七 牧 野 馬 焼 印						
小間古牧	取番牧	矢作牧	油田牧	内野牧	高野牧	柳沢牧
分銅	扇地紙	矢羽	三日月	亀甲	蕨	団扇

第30図 小金・佐倉牧野馬焼印図

小金、佐倉両牧の野馬数の正確な数字は明らかでないが、1,700年頃で1,119頭、幕末で小金牧が1,300頭、佐倉牧で3,800頭程といわれる。江戸時代後期の佐倉四牧では下表のように千数百頭の残馬数の記録がある。おそらく佐倉7牧で3,000頭前後の野馬がいたものと推測される。このうち毎年200頭前後が払い下げられたものと考えられる。

四牧方別残馬数

	牧名	父馬	母駄	式才駒	当才駒	当才駄	計
寛政十二年 1800年	小間子牧	疋 29	疋 455	疋 47	疋 89	疋 86	疋 706
	取香牧	21	279	41	61	53	455
	矢作牧	21	302	35	80	56	494
	油田牧	8	109	12	14	23	166
	計	79	1,145	135	244	218	1,821
文化二年 1805年	小間子牧	27	455	19	96	88	685
	取香牧	21	247	17	39	52	376
	矢作牧	20	277	26	39	48	410
	油田牧	8	81	3	13	7	112
	計	76	1,060	65	187	195	1,583
天保十年 1839年	小間子牧	30	287	30	51	52	450
	取香牧	19	175	13	32	31	270
	矢作牧	21	210	15	46	39	331
	油田牧	10	99	7	20	12	148
	計	80	771	65	149	134	1,199
文久三年 1853年	小間子牧	30	283	24	62	70	469
	取香牧	19	157	12	39	36	263
	矢作牧	21	233	17	43	43	357
	油田牧	10	75	6	10	13	114
	計	80	748	59	154	162	1,203

2. 牧と農民

牧の管理、運営において、農民はしばしばかり出されている。野馬の捕獲にあたっては、野付村より数百人に及ぶ農民が勢子人足として40余日もの期間徴発され、さらに土手の修理、修復を行なう土手普請、井戸を掘ったり雨水の溜を設ける呑井、その他野火防、植林、伐採、牧場見廻り、犬防など隨時労働力としてかり出された。

以下、牧の年中行事で農民が労働力を提供したものあげると、

土手普請

外囲いの土手、内を区切る勢子土手、捕込場の土手等の崩れた箇所を、毎年冬から春にかけての農閑期に野付村の人足を動員して修復、新設した。これには賃金が支払われる。

夏見廻り

江戸の野馬役人が野馬の生育状況の観察、野付村々からの請願の実地見分、土手普請の調査、払い下げの木の確認、植林場所の適否等々牧場管理の全般に対する見分、監査で、7牧で10日間程行なわれた。2~3人の牧士が案内につき、雑用の人足、馬などが野付村から差し出された。

犬防（犬防ぎ）

春、野馬の出産にとって、山犬、狼が最大の敵となる。そこで、鉄砲で射殺したり犬落し穴をつくって捕えた。犬落し穴は野付村から人足を出し、1牧に数箇所の竹や木を使用して穴をつくっている。1つの穴で平均3頭の犬が捕えられている。

植林

野馬の寒暑しのぎのため、松、櫛等を植えている。幕府の財政援助の施策であるともいわれる。各牧に1万本程植えられたようだ。

伐採

松、杉、雜木等は野馬の寒暑しのぎの役割をはたしていたが、繁茂しすぎると野馬の成育や捕馬の妨げとなるため適当に切り透しをする必要があった。また、伐採された木々は野付村に優先的に払い下げられている。

野火防（野火止め）

山火事が広範囲に広がるのを防ぐため、事前に雜木や灌木を一定幅伐り払って焼却した。この作業は各牧ごとに人足を集めて行なった。

牧場見廻り（野先見廻り）

野付村では自村に近い一定区域を毎日1回見廻り、野馬の生育状態を観察し、変わったことがあると担当牧士に報告した。怠るようなことがあると名主、組頭が呼び出されることもあった。

追勢子人足

野馬捕獲の際、野付村々からその村の石高に合わせた割り当てで人足を出した。

代替諸役

野馬捕獲の際、追勢子人足の替りに、入草村、水夫賄村、御払場の雑用村、江戸役人、牧士の使役村など、追勢子人足割りで振り替えられた。

これらの作業にかり出される農民の負担は相当なものであったようだが、反面、農民にプラスになっていることも少なくないようで、慶応4年(1868年)9月、綿貫夏右衛門支配小金牧土惣代の香取貞三郎、白石邦造が御馬方役所に提出した「嘆願書」によると、「小金、佐倉両牧は住吉より連綿と野馬を立ておかれた。そのため私どもは慶長、元和の度に召しだされ牧士役を仰せつかった。すなわち御扶持御絵馬をくだされ綿貫夏右衛門支配となり、野馬の飼養取扱

方を命ぜられ水草など差し支えないよう野趣りをおこない、馬出生の折は狼、山犬が野馬にからぬよう昼夜油断なく防止にあたった。その結果馬数も追々に増加し、年々三歳以上の駒は直下で年賦御払の措置をとることになった。右の払馬は元来寒暑風雪をしのぎ成育したので、草飼のみでもけっこ体力を持続できる。諸国出産の里馬とは違い小丈ではあるが、飼料の負担も少なく20ヶ年は活動できる。昔は百姓の持馬はまれであったが、値段も安いので追々希望者がふえ、田畠のこやしも自然とできるので、百姓もよろこんでいる。ここ10年来、御払値段は高下はあるが、年々御払代金は數千両におよんでいる状況である。かつ、関係村の農民は牧の林枯芝あるいは自生の薬草、栗の実の採取もでき、なにかと衣食の足しになっている。また、御用地内の成本は地元村々へ払い下げとなるので農間の稼ぎともなる。小金牧には野馬のほか、數町歩の御林があり、年々御印の上1,000本を真木に伐るのでこれの貢賃稼ぎも農民のくらしの足しとなっている。』とあり、牧の周辺に植えた松、杉、櫻を利用し、佐倉炭の生産が行なわれていた。当地で多く見られる炭ガマは、この佐倉炭生産との関連が深いと思われる。さらに普請、捕馬の人足などには日当も支払われており、数少ない現金収入の道も開かれている。また、野馬の払い下げの多くは近隣農民で、3~7か年の年賦支払いが常であり中には10~20年のものも見られることから、かなり農民には有利であったようだ。

明治以降の牧

1. 新田開発と牧の統合

明治政府は江戸時代幕府の直轄であった小金、佐倉両牧の広大な土地の開発に着目し、その開墾に着手していく。それは殖産興業の重要な施策の一環であったが、実際は維新の政変による失業者、ことに東京府下の無産窮民の救済がさせられた課題であったためのようである。

しかし、当時の新政府は財政難に苦しんでいたため直接事業を遂行する財力は無く、そこで東京の豪商等に呼びかけて下総開墾会社を組織させ、土地を譲渡する代償として入植者の世話ををするという方法をとった。こうして、明治2年公募した移住民志願者約6,000人とともに小金5牧と佐倉5牧（取香、小間子両牧は政府直轄）の開墾を開始している。開墾地には地名がなかったため、開墾順に従がい名称が付されていく。すなわち、

初富	(中野牧)	七栄	(内野牧)	十余一	(印西牧)
二和・三咲	(下野牧)	八街	(柳沢牧)	十余二	(高田台牧)
豊四季	(上野牧)	九美上	(油田牧)	十余三	(矢作牧)
五番・六実	(中野牧)	十倉	(高野牧)		

以上、13までの開墾地である。開墾はかなり急ピッチに進められたが、自然環境、生活環境ともきびしく、生活の不便さは移住民の定着意欲を低下させ、土地を離れる者も少なくなかった。さらに、会社の経営も不振に陥り、明治5年に早くも解散している。しかし、移住民にはそれ

それ5反5畝(5,500m²)の土地が与えられたので独立農夫として以降細々と開墾を進めていくこととなる。

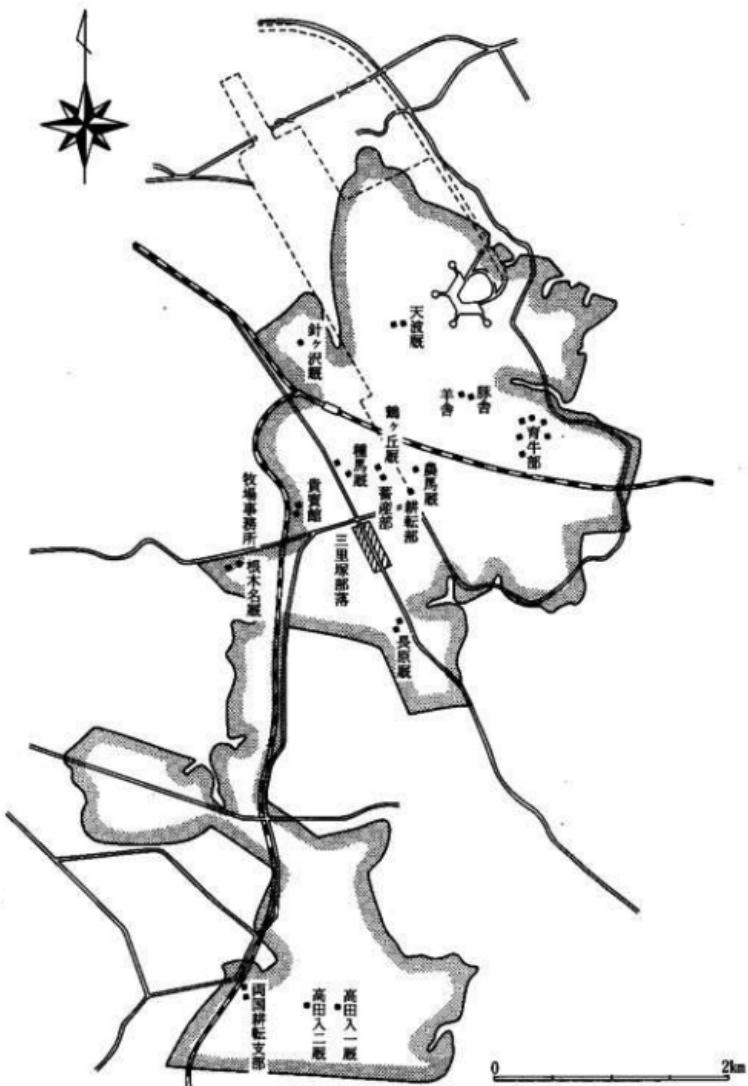
さて、小金、佐倉両牧は先述のとおり大部分は廃止され開墾地となり、牧経営を継続していくのは取香牧と小間子牧の2か所となるが、主力は取香牧であったようで、放牧の野馬はすべて取香牧に集められている。おそらく2,000頭程であったと推測される。しかし、明治5年には馬疫が流行し、相当数の馬が死亡あるいは売却され、わずか212頭の保有に激減し、牧は衰えていった。しかし、この頃から国内でも原料羊毛を確保して毛織物業を興こし、輸入を減らそうとする政策が進められ、取香牧周辺に牧羊場の開設が決定されていく。また、牧羊事業とともに牛馬の改良も急務であることから、取香牧は種畜場に変更、牧羊用地として十倉(高野牧)七栄(内野牧)、十余三(矢作牧)の土地が選定され、明治8年に取香種畜場と下総羊牧場が開設された。その後、明治13年には両者が合併し下総種畜場に、明治21年には宮内省下総御料牧場と改称し、事務所を三里塚に置いた。このように、江戸時代に盛隆した房総の牧は、明治期に入り成田市三里塚の御料牧場へと収束していったのである。

2. 御料牧場

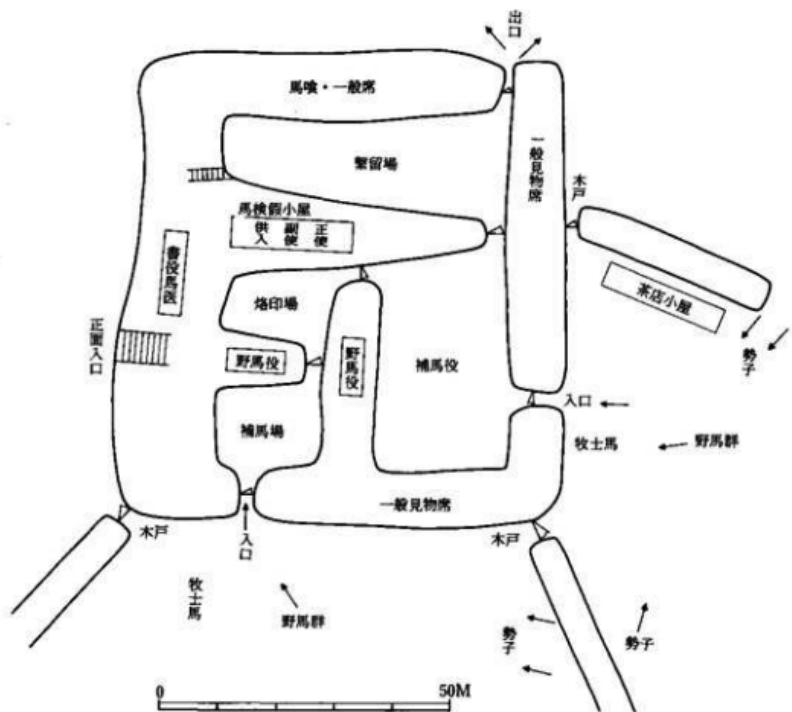
前項でも述べたが、明治8年小金、佐倉両牧は統合、縮小して取香種畜場と下総牧羊場が設置され、日本の家畜改良の基地として再出発する。現在の三里塚地区や大清水地区には部落が形成され、事務所、官舎、牧夫舎、畜舎の建設をはじめ、土手や柵の設置、道路建設等の事業が開始された。その後、下総種畜場、宮内省下総種畜場、下総御料牧場、宮内省下総牧場、下総御料牧場と名称を変えていくものの、主に馬、牛、羊等家畜の放牧、品種改良を行なってきた。また、農耕用の大型機械の導入も全国に先がけて実施し、さらに、昭和期には競走馬の輸入を啓機にサラブレッドの育成にも多大な努力をはらい、昭和2年輸入したトルヌソル号は種牡馬として産駒374頭を有し、クモハタ号をはじめとするダービー馬6頭を世に送り出している。また、昭和10年輸入のダイオライト号は産駒272頭でセントライト号(日本初の三冠馬)を生んでいる。また、獣医学の学生の実地教育の場としても利用されており、日本の牧畜、家畜農業に与えた影響は多大なものであった。なお、この御料牧場も昭和44年、新東京国際空港の建設とともにその幕を閉じていく。

御料牧場遺跡の役割

本遺跡外周の土手は台形を呈すが、当初より土手に囲まれていたとは考えにくい。北辺の土手は高さ、幅とも大規模で他辺の土手とは異なり、県道成田～松尾線を越えて東方に延びている。さらにその延長線上には取香捕込跡(古込)が所在し、また南方には五十石込跡がひえていることから、江戸時代取香牧の主要な土手であった可能性が強い。この土手は取香牧内部を通過することから牧内部を区画する勢子土手と思われる。



第31図 昭和9年下総牧場建物配置図



第32図 取香牧「捕込」復原図（「三里塚」より）

取香牧には4か所の捕込場が設けられているが、そのうち古込は昭和46年に調査されその全容が明らかになった。ここで、捕込跡の1例として古込について触れると、南北80m、東西70mとほぼ方形に土壘がめぐり、内部を4房に区画している。南西コーナー、南東コーナー、東辺に向かって三方から勢子土手が集まり、勢子土手先端と捕込本体との間は幅3m程の木戸が設けられている。牧内の勢子土手の間隔は序々に狭められ野馬は捕込場に追い込まれていくが、この捕込では2方向から追い込んだ野馬が捕馬場に入り烙印場へと送られる。最後は繫留場で馬の見分けがなされる。捕込の土壘上には馬見役、馬肝煎、御馬預、牧使正使、副使等が要所にひかれ、周囲には一般席が設けられ屋台なども出店しておおいににぎわったようだ。このように捕込場では、頭数、種別を記録し、獻上の馬、払い下げの馬、野返しの馬などに区分けしている。

牧内の捕込からは四方に勢子土手が延びていくが、その1条が遺跡外周北辺の土手と考えら

れる。

明治期になると、日本の牧場の草わけ的 existence であった御料牧場の一角、本遺跡の所在する長原地区には、明治11年、官舎、病畜舎が新築され、周囲には土手を築いたといわれる。したがって、外周部と内部を区画する土手はこの時に築かれたものと思われる。ここでは主に牧場内における衛生に関する一切の業務を行なうとともに、重症の家畜を病畜舎に入れ治療に当たっている。また、明治13年以降は獸医学を広く全国に普及するため、駒場農学校（現東京大学農学部）の獸医科の学生の実地治療の研究や家畜の飼養管理、農作業の実習地となり、當時牛や綿羊の伝染病に備えて隔離畜舎等も建てられている。この実習は第二次世界大戦前まで続けられ、本遺跡が所在する長原地区が学生の実地教育に果たした功績はたいへん大きかったといえる。しかし、ここも昭和44年、新東京国際空港の建設に伴い幕を閉じていく。

参考文献

- 「下総御料牧場史」 宮内庁 昭49
「成田市史」近現代編 成田市史編纂委員会 昭61
「酒々井町史」通史編上巻 酒々井町史編纂委員会 昭62
「千葉県の歴史」小笠原長和・川村優 昭46
「房総の牧」第3号 房総の牧研究会 昭60
郷土史講座講義録（第13回）下総牧とその開発 船橋市郷土資料館 昭55
郷土史講座講義録（第14回）佐倉牧とその周辺の開発 船橋市郷土資料館 昭56
「三里塚」（財）千葉県北總公社 昭46

写 真 図 版



遺跡周辺航空写真

図版 2



土手 1・2近景



土手 1・2近景



北辺外縁部土手手近景



土壠断面



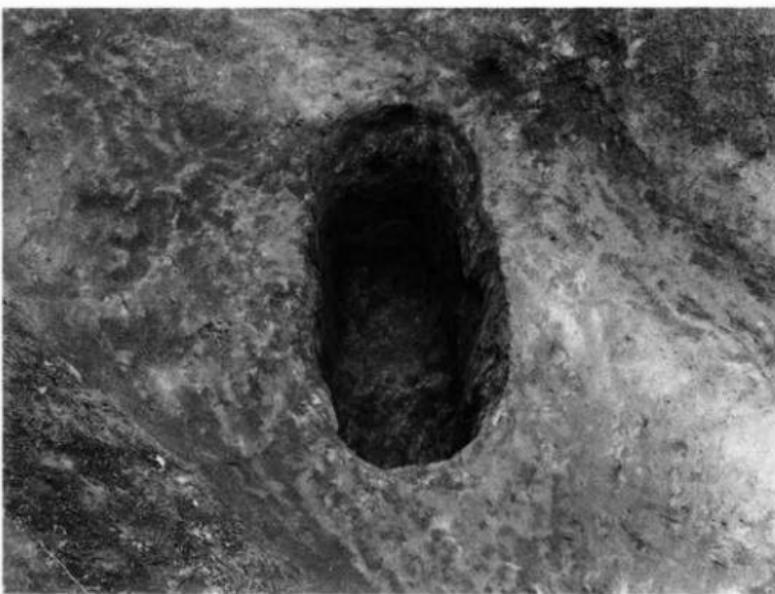
第1ブロック遺物出土状況



第2ブロック遺物出土状況



006全景



005全景

圖版 6



001号堅穴状遺構全景



002号堅穴状遺構全景



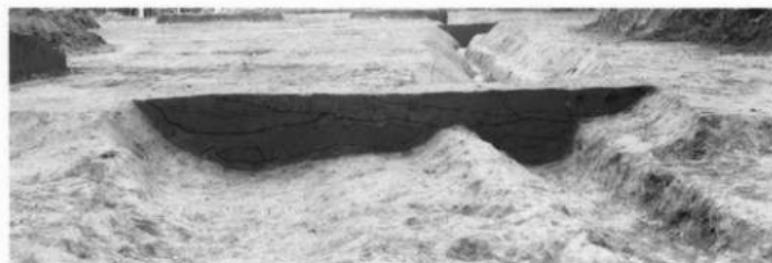
003号堅穴状遺構全景



004号堅穴状遺構全景



M—001~003全景



M—001~003土層斷面



M—001~003土層斷面



M-005~011, M-001~003



M-002, 003



M-014, 012



M-014



M-017



M-012, 014

図版 10



M-004



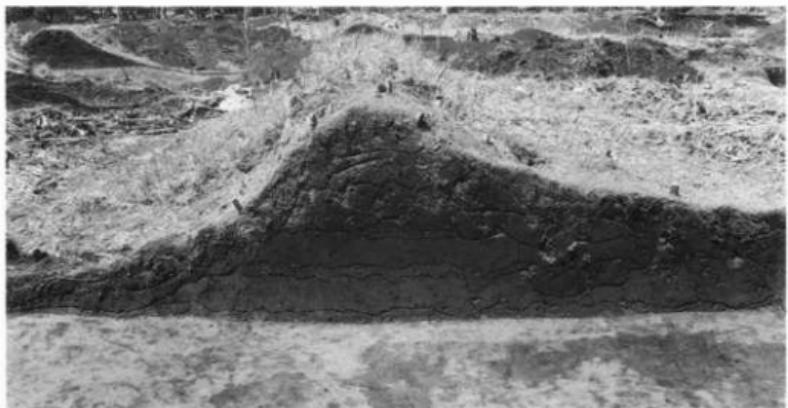
土手 1、M-004 土層断面



土手 1 土層断面



土手 2 土層断面



土手 2 土層断面

圖版 12



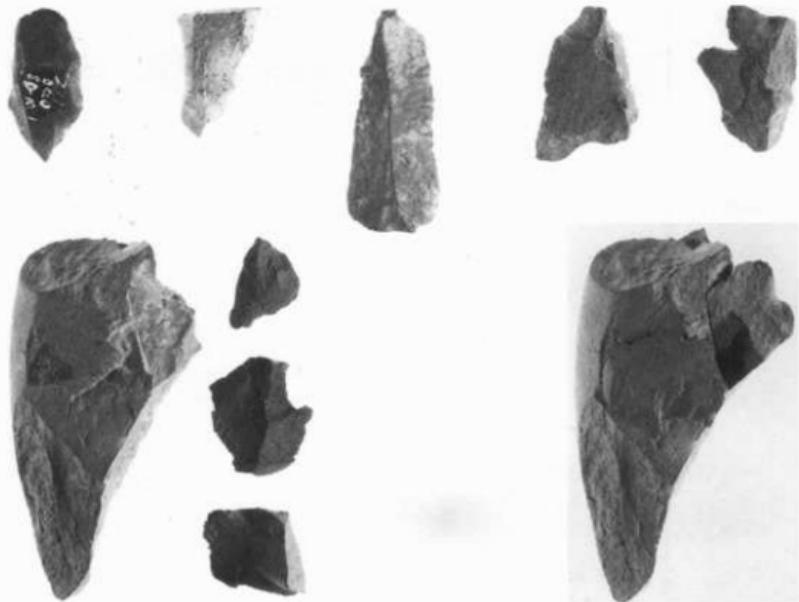
土手3 土層断面



土手4 土層断面



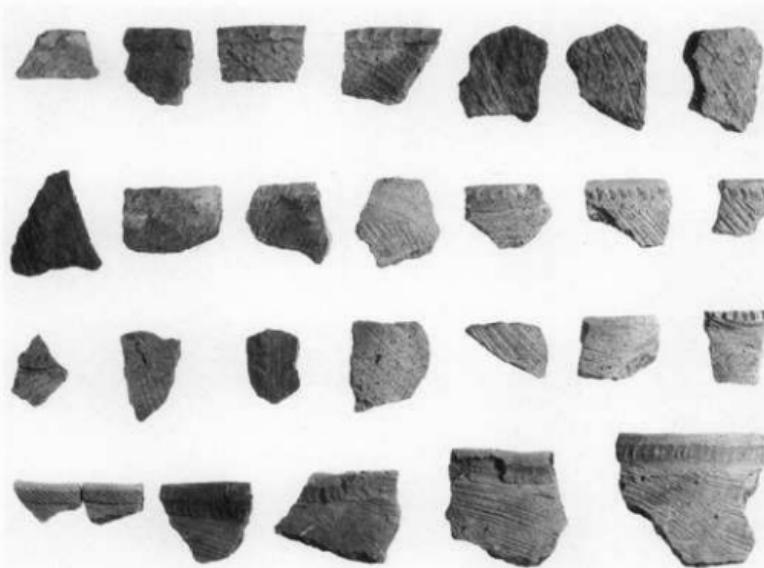
土手5 土層断面



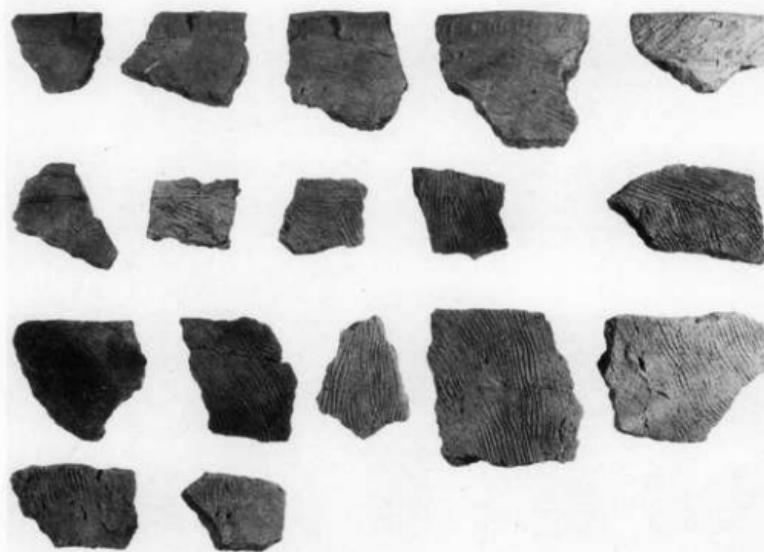
先土器石器



包含層出土遺物



包含層出土遺物



包含層出土遺物

御料牧場遺跡

— 麻薺犬訓練所建設予定地内埋蔵文化財調査 —

印 刷 昭和63年3月25日

発 行 昭和63年3月31日

発 行 建 設 省

東京都千代田区大手町1-3-1

財団法人 千葉県文化財センター

千葉市葛城2-10-1 (0472)25-6478代

印 刷 株式会社 弘 文 社

市川市市川南2-7-2 (0473)24-5977代
